第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域

第6章　高浜・金浜地区における震災の経験
―住民の語りを中心に―

宮坂　清

はじめに

東日本大震災は宮古市高浜・金浜の住民にとっていかに経験されたのか。本稿では主に住民の語りを紹介しながらこの問いについて考えていく。未曾有の規模で押し寄せ、甚大な被害を出した地震津波から5年が経過し、人々の生活は少なくとも表面的には落ち着きを取り戻しつつあるように見える。しかしあの日から始まった辛い日々の記憶は、いまも人々の心に深い影を落としている。本稿は、その記憶を記録に留め、将来世代に引き継いでもらうことを意図している。

そのため、まず背景となる情報を確認し、次いで両地域に暮らす人々による震災についての語りや、すでに活字にされている体験談の紹介を行い、必要に応じて若干の考察を加えるという形で稿を進める。また人びとの語りや体験談の紹介を行う際、読者が参照しやすくなるよう内容に沿って整理を行い、また考察を加えるが、多くの語りや体験談がもつリアリティをできるだけそのままに留めるよう心がける。

ここでは高浜と金浜を比較しつつまとめて取り上げる。両地区が隣接していること、組織や地域住民の関係が密接であること、そして震災に関する記録や人々の語りに互いを関連づけたものが多いことなどから、そのようにまとめて扱うことが妥当と判断した。ただし、各々の異なる点が重要である場合には個別に扱う。

筆者が震災後初めて宮古市を訪れたのは平成25年3月、震災の2年後である。車で見て回った高浜・金浜は、すでにがれきがおおむね撤去されて更地になった状態にあり、防潮堤の決壊箇所も補修されていた。当初どのような惨状だったかを知らない私の目には、震災の痕跡が減り、平穏な日常が戻ってきているように見えた。しかしその後、平成26年8月に機会を得て両地区の方々にお話をうかがっていくうちに、まだ震災は終わっていない、むしろ震災は人々の心のある部分を占め続けており、心を構成し続ける重要なリアリティとして生き続けていることを思い知らされた。本稿が、経験した人と経験していない人の間に、そのリアリティを伝える媒体となることができれば幸いである。

1　地区、および過去の地震津波の概要

(1)　地区の概要

高浜・金浜はかつてそれぞれが独立した村であったが、ともにまず磯鶏村に、次いで宮古市に統合合併された歴史をもつ。すなわち、明治22（1889）年に東閉伊郡で町村制が施行された際、旧制度の磯鶏村・高浜村・金浜村・小山田村・八木沢村が合併し、新制の磯鶏村が成立した。次いで昭和16（1941）年に、磯鶏村は、宮古町・山口村・千徳村と合併した上で市制を施行し、宮古市が誕生している。

高浜は外洋から南西に向けて細長く切り込んでいる宮古湾の最奥部近くの北岸に位置する。磯鶏から南西へほぼ直線に海岸線が続き、その海岸沿いに国道45号線が通り、集落は海岸沿いの平坦地を中心に広がる。戸数は明治期に60～70軒ほど、昭和20年前後には100軒ほどであったといい、昭和35（1955）年のチリ地震津波を契機としてアパートなどが増えたという。高浜の岩間一族は江戸時代以前に近江から落ちのびてきたといわれ、同じく佐々木一族も初代は落人であったといわれる。生業はもともと漁業に関係する家が多かったが、数度の津波を契機に減っていった。集落の内部は大きく3つに分かれ、自治会の組織も3つに分かれている。氏神は高浜稲荷神社で、檀那寺は金浜の江山寺である【宮古市史 民俗編 上巻】。東日本大震災前の平成22（2010）年の国勢調査によれば、人口841人（男397人、女444人）、世帯数311であった。

金浜は高浜の南西に位置し、南は津軽石と隣接している。高浜から南西に向かう海岸線は金浜の前で湾曲し、津軽石川河口へと続いてい

る。江戸時代以前、金浜は船越村（現山田町）の知行地で、江戸時代も船越氏の給地だったが、寛政期に百姓一揆があって全村が蔵入地となり、明治22年に合併して磯鶏村の一部となった。もともと半農半漁であり、鮭漁を行っていたが、元禄年間に津軽石村との間に紛争があり、その後、鮭漁をやめている。最近は会社勤めの人も多い。戸数はもともと40～50軒ほどであったが、昭和50年代から新しい住民が増え、平成3年に193軒になったが、半分以上は新住民である。氏神は金浜稲荷神社で、檀那寺は江山寺である【宮古市史 民俗編 上巻】。東日本大震災前の平成22（2010）年の国勢調査によれば、人口666人（男316人、女350人）、世帯数221であった。

(2) 地震津波の歴史

高浜・金浜は宮古湾に面していることから、地震津波の被害を頻繁に受けてきた歴史をもつ。以下では、東日本大震災とその被害をより立体的に把握するための背景知識として、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に掲載された資料を参照し、関連する部分の概要を示す。

ア 近世までの地震津波

高浜・金浜における地震津波の最も古い記録は、延宝5年3月12日（1677年4月13日）の地震津波のもので、東北地方で20時頃から明け方まで20回余りの地震があり、波にとられた家の数は金浜12～13軒、高浜1～2軒だった【雑書】。また、安政3年7月23日（1856年8月23日）13時頃に地震があり、赤前・金浜で人家が大きな損害を受け【浮世考がい記】、金浜村11軒、高浜村20軒余が流失または損壊した【金沢家文書】。

イ 明治三陸地震津波

明治29（1896）年6月15日午後7時32分頃、三陸沖を震源とする明治三陸地震が発生した。震度2程度と緩やかな揺れだったため人々はあまり気にとめなかったが、約30分後に大音響とともに大津波が来襲し、最大となった第2波が満潮時と重なったこともあり、大きな被害をだした。

「東海岸ヲ騒ガシタ不吉ナ数々ノ前兆」（宮古測候所所蔵資料）によれば、来襲した津波は、金浜13呎、高浜10呎であった。宮古湾の入口に近い宮古15呎、鍬ケ崎30呎、磯鶏20呎と比べるとやや低い。高浜でその年の春から帆立貝や烏貝などが繁殖し、また地震の20日ほど前には鰻が海岸に群集するという前兆があり、これは安政3年の津波の前兆に酷似していたという。

「明治二十九年地震報告」（中央気象台）によれば、磯鶏村全体の被害は、総人口1千996人のうち死者90人、負傷者54人であり、総戸数365のうち流失したり半潰した家屋が109あるなど甚大な被害をだした。

より詳細な調査に基づく「岩手県沿岸大海嘯取調書」（山奈宗真）によれば、磯鶏村では金浜・高浜を含む7か所で被害があり、死者100人、負傷者55人、流亡戸数74戸、潰戸数68戸、流亡納屋52棟、潰納屋32棟であった。北方の宮古湾口から激浪が走りこみ海浜を破壊したという。「岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図」（山奈宗真）にはより詳細な被害が記されている。高浜では打上浪11尺、浪走り100～120間で、死者負傷者はいなかったが、全戸数83戸のうち流亡戸数42戸、潰戸数16戸であった。なお、安政3年の地震の際は打上浪が15尺あり、今回より4尺高かったとしている。金浜では打上浪15尺、浪走り70～150間で、死者16人、全戸48戸のうち流亡戸数22戸であった。

この地震津波の後で金浜の江山寺境内に津波碑が建てられた。「明治二十九年六月十五日／三陸海嘯横死者精霊／旧五月五日夕／施主 金浜若者中」と記されている。なお、この津波碑は東日本大震災で浸水している。

ウ 昭和三陸地震津波

昭和8（1933）年3月3日午前2時31分、三陸沖を震源とする

マグニチュード8・1の昭和三陸地震がおきた。揺れは明治三陸地震のときより強く感じられ、家屋の一部に壁の亀裂や石垣の破損など軽い被害がでた。地震の約30～40分後に津波に襲われ、大きな被害をだした。

「岩手県下踏査報告」（気象台技師、験震時報 第七巻）によれば、高浜で低地の民家が流失・損壊し死者4名がでた。海岸の山腹に2・4～2・9㍍の辺まで浸水し、草が変色している所があった。この辺りでは津波は4回ほど来襲し、湾の最奥部の津軽石方面から反射してきたものもあったという。

「三陸沖強震に伴ふ津浪調査報告」（盛岡測候所、験震時報 第七巻）によれば、高浜では津波の高さ9㍍、金浜では4㍍であった。「宮古湾に於ける襲来の観測並びに被害地踏査報告・重茂村災害地踏査復命書」によれば、高浜には磯鶏須賀の突端より分岐した津波が漸次突入し、部落の前方に当たり、広大な砂丘（突出した半島に造船場、鰯粕製造納屋などの建物があった）にいた男女4人が部落に避難する際に、津波に浚われ3人が溺死した。この砂丘の陸地に接している部分が約50間にわたり津波により切り抜かれた。高浜部落に侵入した波は7尺ほどの高さで、家屋2戸が流失し、半壊24戸、浸水24戸、負傷者3人、伝馬船20隻が流失し発動機船5隻が破損した。金浜では5～6尺の津波が来襲し、非住家1棟が流失、半潰家屋4戸、浸水4戸、伝馬船10隻が流失したが、人畜には被害がなかった。

また「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」（中央気象台、験震時報 第七巻）によれば、高浜は人口698人のうち死者4人、負傷者3人であり、戸数97戸のうち、流失2戸、全壊4戸、半壊20戸、床上浸水12戸、床下浸水12戸であった。同じく金浜は、人口367人で人的被害はなく、戸数51戸のうち、流失1戸、半壊4戸、床上浸水1戸、床下浸水3戸であった。なお、『田老村津浪誌』（田老尋常高等小学校編、1934年）によれば、より被害の大きかった田老村で、磯鶏村金浜自警団28名が1日間、救護の応援活動を行った。

より詳細な調査に基づく「三陸地方津浪災害予防調査報告書」（農林水産局）は以下のように報告している。宮古湾口から南南東に向かった津波は、まず津軽石村の赤前に押し寄せ、それが引いてきて高浜の側面に襲来し、その後は東北東に向かって進んだ。津波の高さは5㍍であった。高浜では海浜より半島状に突出する砂州が防波堤の役割を果たしており、水深は浅いものの船溜として使用していた。この砂州は湾内の潮流などにより自然に堆積したものであったが、この津波によりその中間部分が衝き破られ、潮流が急になった結果、船溜に使用できなくなった。引き波による被害を防ぐため、県の農業土木工事事業により、新たに高さ4・2㍍、上部の幅0・6㍍、長さ250㍍の護岸（栗石入混凝土造）を建設し、その前面を浚渫し漁船の接岸ができるようにするという計画が出された。金浜については、赤前に突き当たった余波が押し寄せたのみで被害は少なかった。津波の高さは5㍍であった。沿岸には工場や倉庫などが7棟あったが全て流され、漁船も全て流された。地震の後、沿岸部に津軽石川木材荷揚設備としても用いられる混凝土造の護岸と埋め立て工事を行っており、竣工すれば津波予防に有効であると認められた。

エ　チリ地震津波

昭和35（1960）年5月24日早朝、地震もないのに大津波が日本の太平洋沿岸を襲った。この津波の原因となったのは、日本時間5月23日4時11分に南米チリ沖で発生したマグニチュード9・5の巨大地震であり、発生からほぼ1日後に津波が日本の沿岸部に到達した。

「岩手県災害関係行政資料Ⅰ」（災害関係行政資料等整備調査委員会）によれば、津波の被害は日本の太平洋沿岸全域に及んだが、波高が高く大きな被害がでたのは比較的大きな湾であり、波高が湾口では低くても奥にいくにしたがって高くなるという特徴があった。宮古湾でも湾口2・0㍍、中央部3・0～5・0㍍、湾奥部で6㍍と次第に高くなっている。津波の波高は全体に明治三陸地震、昭和三陸地震のほうが高いが、これらの地震では湾の入口で高く、奥に行くにしたがって低くなっていた点が大きく異なる。波がじわじわと水位が上がるかたちでやってきたため、高浜・金浜で人的被害はなかったが、防護処置の脆

弱な湾の奥部に大きな津波が押し寄せたため、養殖施設などの経済的な損失が大きくなった。なお、宮古市では当日に望楼勤務していた消防士が閉伊川の異変にいち早く気づいて報告し、3時45分という早い段階で緊急避難信号（サイレン吹鳴）を発した。また磯漁作業のため4時前後に海岸にいた沿岸漁民（消防団に在籍している者が多い）が異常な引潮を発見し、通報してサイレン警鐘を行ったことも早い対応につながった。津波警報の発令が遅れた大船渡市は多くの死者をだした。

「チリ地震津波調査報告書」（仙台管区気象台）によれば、高浜では、県道東側の民家その他の建物が全て流失、西側の建物もほとんど山際に押しつけられて潰された。民家が道路をさえぎり、また船が道にあがり通行が困難となった。波は道路の上160センチメートルほど、海面より5・3メートルの高さであった。旧高浜小学校の校庭は水に浸かり、門柱の御影石の片方は横倒しになり、もう片方は見当たらなくなっていた。近くの川にかかった県道の橋は流失した。金浜では、国鉄山田線線路の東側は建物が全て流失または全壊した。山田線の線路は高さ7メートルぐらいの土堤の上を通っているが、その土堤のさらに2メートルぐらい上に津波の跡があった。線路の西側にも土堤の切れ目から波が流れ込んだため、建物の軒下まで達していたところもある。金浜から法の脇に至る線路は激しく破壊され、あめのように曲がって山際に寄せられていた。

地震の後、金浜・古館に建てられた津波碑には、以下のように記されている。「（正面）昭和三十五年五月二十四日／チリ地震津波／午前二時五十分大津波襲来／（正面下）大地震の後には津波が来る／外国地震でも津波は来る／潮がめだってひいたら高い所へ／（背面）昭和三十五年五月二十四日未明突如チリ地震襲来すなんの前ぶれなく正に『寝耳に水』である過去の経験に『地震は津波を伴うもの』これまでの常識は一瞬にして覆るそれだけに瞬時のうちに住宅財貨を失い生産手段をもぎとられ被災地特に高浜金浜津軽石の一部及び赤前各地域の惨状言語に絶する／被害総額九億五千万円／昭和三十六年五月二十四日／宮古市」その他背面に、「被害区分・世帯数・人員」がそれぞれ記されている。流失・三六・二〇一、全壊・七六・四〇七、半壊・七〇・四〇七、床上・二一三・一〇八三、床下・四五八・二三〇四、計・八五三・四四〇一。最後に「宮古市建之　石工鈴木祐一」とある。なお、この津波碑は東日本大震災で流失したが、復旧している。

チリ地震津波を機に、高浜で延長1千025メートル、金浜で1千230メートル、それぞれ高さ8・5メートルの防潮堤が建設され、また津軽石川の河口に水門が設けられた。東日本大震災の後、同10・4メートルまで嵩上げされた。

チリ地震津波から約30年後の平成3（1991）年、高浜自治会が中心となって回想文集『チリ地震津波より三十年 あの惨状を振り返って』が制作された。高浜におけるチリ地震津波の経験を知るのに有用な資料である。発行当時の宮古消防署長、宮古消防団第十一分団長、元高浜小学校校長、元高浜青年会会長が回想文を寄せているほか、高浜住民へのインタビュー2本、回想文9本を掲載している。

地震がないのに津波が来たこと、宮古湾の奥部浅瀬に到達してから波が大きくなったこと、集落の大半の家屋が流されたり浸水したりしたこと、高浜部落の前に突き出ていた「出崎浜」と呼ばれる砂浜が破られたこと、その浜から流された男女3人が亡くなったことなど、チリ地震津波の際立った特徴や出来事が記されている。高浜の人びとにとりチリ地震の経験がそれ以前の地震津波、特に昭和三陸地震津波の経験と大きく異なるものであったこと、そしてその経験が30年を経ても大きなものとして記憶され続けていることが読み取れる。

オ　十勝沖地震津波

昭和43（1968）年5月16日午前9時49分に襟裳岬沖でマグニチュード7・8の地震が起き、宮古市では震度4が観測された。地震発生から31分後の10時20分、宮古市で津波第1波が観測された。

「広報みやこNO．147」（昭和43年6月1日号）によれば、宮古湾では最大2・16メートルを観測し、海苔・カキ・ワカメの養殖施設などが被害を受け、被害額は3億6千万円に達した。赤前の津波堤防は4・98メートルの最大波高を記録した。ただし、干潮時と重なったため内陸の被害は

それほど大きくならなかった。

カ　まとめ

高浜と金浜は、宮古市の他の沿岸地域と同様に、古くから地震津波の被害を繰り返し受けてきた。詳細な記録が残っている明治期以降だけでも、明治三陸地震津波・昭和三陸地震津波・チリ地震津波と、大きく3回、大きな被害を出す津波に襲われている。その3回の地震津波はむろん同じではなくそれぞれに特徴がある。

明治三陸地震は、揺れが小さく人々が油断していたところへ大津波が来襲したこと、満潮時と重なりより津波が大きくなったことが特徴としてあげられる。波の高さは11～15尺（3・3～4・5㍍）で、死者は高浜にはでなかったが、金浜では16人おり、流出ないし損壊した家屋は、高浜で全戸数の半数強、金浜で半数弱にのぼった。

昭和三陸地震は、真夜中に発生したこと、揺れが明治三陸地震のときより強く感じられたこと、高浜で被害が大きかったことが特徴である。津波の高さの記録は約1・5㍍（5尺、津波浸水高か）～9㍍（津波遡上高か）と幅があり、高浜で死者4人・負傷者3人、金浜では人的被害がなく、建物の被害は高浜で流失・損壊26戸、金浜5戸であり、高浜の被害がより大きいのがわかる。赤前に寄せた押し波が引き波となって高浜に押し寄せたとみられる。

チリ地震津波は、地震が全く感じられないまま津波がやってきたこと、宮古湾の奥部に行くにしたがって波が高くなったこと、人的被害はなかったが建物や養殖施設などの被害が大きかったことが特徴である。浸水高は高浜で5・3㍍であった。早朝に来襲したにも関わらず人的被害がなかったのは、サイレン警報が迅速に出されたこと、押し寄せるというよりじわじわと水位が上がるかたちの津波であったことによると考えられる。

地震津波の被害や教訓を記した記録について、金浜に石碑が2基（昭和三陸津波、チリ地震津波）あり、また高浜ではチリ地震津波の30年後に回想文集を発行するなど、高浜・金浜の人々が地震津波の教訓を後世に伝えようとしてきたことがうかがえる。

2　東日本大震災の概要

(1)　地震津波と被害の概要

平成23（２０１１）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9・0の地震が起き、東北地方の太平洋沿岸を中心に強い揺れが観測され、宮古市でも震度5強から5弱の揺れが記録された。主な破壊時間は約１６０秒に及び、余震も頻発した。気象庁は地震発生から3分後の14時49分、岩手県・宮城県・福島県に津波警報（大津波）を発令し、予想される津波の高さを3㍍としたが、15時14分には6㍍、15時30分には10㍍以上と、高さの予想が引き上げられた。やがて津波が到来し、宮古市では日立浜の気象庁検潮所が15時26分に8・5㍍以上の津波浸水高を観測したほか、宮古市重茂で観測された津波遡上高40・5㍍は国内最高記録を更新した。

「宮古市東日本大震災浸水図」を参照しつつ、浸水範囲を以下に記述する。宮古方面から津軽石に至るまで宮古湾沿岸を国道45号線が通っているが、その国道は、磯鶏を通過して宮古商業高校を超えると、そこから先は津軽石に至るまで、高浜小学校近くの一部分を除き、すべて浸水している。やや海に突き出た箇所にあたるホテルルートイン宮古の近くで津波遡上高18・60㍍、その先の左手にみえる喫茶店「異人館」付近で同10・60㍍、その先の高浜集落に至るまで同10㍍以上ある。高浜集落に至ると、集落の東北端付近から内陸に入り簡易郵便局を過ぎて国道に戻る道路があるが、その道路より海側地域は全て浸水し、同道路の山側地域も平坦地は広範に水に浸かっている。集落入口付近で津波浸水高5・09㍍、高浜簡易郵便局付近同4・62㍍、避難場所となっているコープケミカル高浜住宅高台の下で同4・52㍍、集落の南西端付近で同5・43㍍を観測している。津波は高浜小学校へ向かう坂道をも遡上し、小学校前で17・85㍍の遡上高を記録している。さらに進んで金浜の集落に入ると、避難場所となっている金浜稲荷神社の下付近で津波遡上高13・47㍍、江山寺付近で同13・09㍍、宮古湾温泉マース付近で津波

浸水高11・04㍍を記録している。

高浜集落における津波浸水高が4・52～5・43㍍であることと高浜海岸に当時8・5㍍の防潮堤があったことを併せて考えると、高浜集落には一時防潮堤を越えて水が入ったものの、湾内の水位と同じになるほどには入らないうちに、湾内の水位が下がったと考えられる。また集落の南西端で津波浸水高が最も高くなっていることから（5・43㍍）、南西方面からの引き波が侵入したと考えられる。これに対して、金浜は津波浸水高でみると高浜の倍以上あって11㍍を超えており、より多くの水が流れ込んだことがわかる。津軽石を含む宮古湾奥部全体をみても金浜の津波浸水高が最も高いが、これは「宮古湾温泉マース」前の防潮堤が約30㍍にわたり決壊し、多量の水が流れこんだことも影響していると考えられる。津波浸水高11・38㍍、津波遡上高17・8㍍という数字は、明治以降にこの地域に来襲した他の津波と比較しても際立って高い。

次に、宮古市および高浜・金浜の被害の概況は以下のとおりである。宮古市全体の死者数は517人、行方不明者（死亡認定者）は94人である。高浜は死者5人（死亡届出者4人、死亡認定者1人）、同じく金浜は死者28人（死亡届出者27人、死亡認定者1人）である。人口比でみると、高浜の死者行方不明者は人口の約0・6％、同じく金浜は約4・1％であり、金浜の人的被害の大きさがわかる。

家屋の被害は、市全体で住家4千449棟、非住家が4千639棟で、合計9千088棟が被災している。被災した住家のうち全壊したのが2千677棟で60・2％を占める。高浜では家屋倒壊が計318棟、金浜では307棟である。表1をみると、金浜では倒壊数のうち全壊が288棟と9割以上を占めているが、これは平坦地の津波浸水高が高かったことが影響していると考えられる。

表1　家屋倒壊数（平成24年6月29日現在、住家・非住家合計）

地区	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	合計
高浜	165	75	58	20	318
金浜	288	10	3	6	307

以上、地震津波とその被害の概況をみると、記録に残る地震津波と比較して、津波・被害ともに際立って大きいことがわかる。これまでも繰り返し津波に洗われてきた地域ではあるが、これほどまでに巨大な津波被害があったことをうかがわせる記録は存在せず、人々にとってまさに想像を絶する津波であったのだ。それでも高浜では8・5㍍の防潮堤があったことにより津波浸水高が低くなり、また防潮堤が決壊した金浜でも、決壊に至るまでのあいだ、人々に避難する猶予を与え、それらにより被害は少なくなったと考えられる。

(2) 公的な調査・対応の記録

ア　公的な調査や対応の記録

地震津波の発生に際し、宮古市をはじめとして公的な機関は諸々の対応をとった。以下では、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に収められた資料「東日本大震災の記録～岩手県宮古市」に含まれる、公的な調査や対応の記録のうち、関連部分の概要を示す。地震発生から市内の避難所の閉鎖が決まった8月8日まで、高浜・金浜でどのような動きがあったか、その概略をまとめておく。

■3月12日（土）9時30分：□金浜老人福祉センターへ170人が避難、水はあるが長くはもたない。

■3月12日（土）12時20分 調査報告：□金浜地区、高浜地区の国道45号は瓦礫のため通行不可能、水没、倒壊家屋多数、車両が進入不可能で孤立状態。□高浜小学校の校庭まで津波浸水。□高浜地区で2人流されたとの目撃情報、行方不明者2人との情報あり。□金浜老人福祉センターへ70人（夜は100人ぐらい）が避難、毛布、食料、カセットコンロ、ろうそく、仮設トイレの要請あり。□稲荷神社高台へ50人が避難、毛布、食料が不足。□コープケミカル高台へ50人が避難、地域で炊き出しをしながら高台にある物置や社宅の空き部

屋、倉庫で寝泊まりしている。

■3月12日（土）12時30分：花輪伝承館へ70人が避難（うち40人は高浜地区の住民）、負傷者2人。

■3月13日（日）7時00分：□花輪伝承館へ80人が避難、第十七分団倉庫及び日本赤十字社の物資を配布済み。

■3月13日（日）□国道45号は、金浜地区まで1車線を確保（都市整備部）。

■3月13日(日)□国道45号南ルートは津軽石地区の駒形橋まで開通(都市整備部)。

■3月14日（月）□磯鶏―津軽石間、重茂地区の捜索活動、北海道から470人増員、広域で2千人体制（自衛隊）。

■3月14日（月）□高浜地区通電。

■3月15日（火）□藤の川―金浜間は片側1車線通行が可能、高浜小学校―三陸縦貫自動車道宮古道路宮古南ＩＣ間は通行止めし、撤去作業中（都市整備部）。

■3月15日（火）□三陸国道事務所による道路状況は、国道45号高浜小学校―金浜間は作業終了、三陸縦貫自動車道宮古道路宮古南ＩＣ内に空洞箇所あり、片側通行で工事中（都市整備部）。

■3月19日（土）□自動車の撤去台数は、1千台を超えた。（松山地区、藤原埠頭、宮古温泉マース北側）（都市整備部）。

■3月21日（月）□築地地区、高浜地区の歩道の瓦礫撤去を行う。（三陸国道事務所）。

■3月22日（火）□高浜地区、金浜地区は電源車での対応（東北電力）。

■3月22日（火）□金浜地区、高浜地区で一部通電の予定（東北電力）。□水道復旧状況は、金浜地区、高浜地区で送水試験（上下水道部）。

■3月24日（木）□藤の川地区から高浜地区にかけての調査は、国道の瓦礫撤去が必要（上下水道部）。

■3月25日(金)□水道復旧状況は、高浜地区で一部通水（上下水道部）。

■3月27日（日）□国道45号築地地区、高浜―金浜間の瓦礫を撤去（三陸国道事務所）。□水道復旧状況は、高浜地区から金浜老人福祉センターまでの復旧作業を行う（上下水道部）。

■3月27日（日）□水道復旧状況は、金浜地区の復旧作業を進める（上下水道部）。

■3月28日（月）□水道復旧状況は、金浜地区…の通水試験、遺体捜索作業により中断（上下水道部）。

■3月29日（火）□金浜地区の瓦礫の撤去作業は明日30日の午前中で終了(三陸国道事務所)。□金浜地区の防潮堤の盛土作業は1週間(宮古地域振興センター)。□金浜地区の高台は給水車での対応（上下水道部）。

■3月30日(水)□水道復旧状況は、金浜―八木沢方面の高台に通水（上下水道部）。

■3月31日（木）□金浜地区の防潮堤、大型水門を調整（宮古地域振興センター）。

■4月2日（土）□津軽石地区、金浜地区、鍬ヶ崎地区で自衛隊とともに遺体捜索（宮古市消防団）。□金浜地区は明日3日まで自衛隊の給水車で対応、月曜日から通水が可能（上下水道部）。

■4月3日（日）□金浜地区の防波堤の応急復旧は今週に完了予定（宮古土木センター）。

■4月7日（木）□磯鶏地区、高浜地区、津軽石地区の国道45号の歩道の瓦礫、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□高浜地区は2～3日で終了の見込み（三陸国道事務所）。□戸別送電は、藤原地区、高浜地区、津軽石地区で50件（東北電力）。

■4月12日（火）□国道45号の藤の川地区、高浜地区、金浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□高浜地区の側溝蓋、転落防止柵の補修（三陸国道事務所）。

■4月13日（水）□国道45号の藤の川地区、高浜地区、金浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□三陸縦貫自動車道宮古道路宮古南ＩＣ付近の道路復旧は本日終了（三陸国道事務所）。□高浜地区の側溝蓋、転落防止柵の補修（三陸国道事務所）。□明日14日か明後日、高浜地区、神林地区で測量船による測量を実

施（海上保安庁）。

■4月14日（木）□国道45号の藤の川地区、高浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去、金浜地区は本日終了（三陸国道事務所）。□高浜地区の側溝蓋、転落防止柵の補修（三陸国道事務所）。□金浜地区の企業から苦情あり。三陸国道に瓦礫撤去を依頼、瓦礫撤去が完了次第着手（東北電力）。□金浜地区の江山寺付近を残すのみ、復旧率は99％（上下水道部）。

■4月15日（金）□国道45号の藤の川地区、高浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去、本日をもってほぼ完了、来週から道路の本復旧に着手（三陸国道事務所）。

■4月18日(金)□住民要望があった箇所の金浜地区で通電(東北電力)。

■8月8日（月）□決定事項・避難所は、8月10日をもって全て閉鎖することとする。

イ　避難所などに関する記録

地震津波の後、自宅に住めなくなった高浜・金浜の人々が避難生活を送り、また地域への救援物資の補給や情報の拠点となったのは、主に金浜老人福祉センター、花輪農村文化伝承館、高浜村上商店である。震災前に「避難所」に指定されていたのは高浜小学校であったが、津波が同校の校庭まで押し寄せたため、急遽、近くの金浜老人福祉センターが避難所とされた。また、津波の直後、金浜の三陸縦貫自動車道にいた人々は偶々そこに居合わせた配送車により花輪へ移送され、花輪農村文化伝承館で避難生活を送ることになった。金浜老人福祉センターが手狭だったこともあり、半壊家屋が多かった高浜では避難せず自宅に留まる住民が一部おり、集落の中心にある村上商店が救援物資や情報の拠点となった。

「東日本大震災避難所等提供資料」に含まれる、避難所の状況をうかがい知ることのできる資料を一部紹介する。「大震災 宮古市避難所状況一覧 平成23年3月20日」をみると、金浜老人福祉センターには避難者が185人おり、乳幼児が1人含まれている。電気・ガスは確保できており、水は給水車で対応し、飲食物の配給状況は適度で、炊き出しが行われている。必要品（依頼品）としてあげられているのは、ガムテープ、味噌、紙コップ、手指消毒薬である。高浜村上商店では、ガスはあるものの電気と水道は通じていないが、飲食物は適度にあり、必要品（依頼品）として、ミルク、オムツ（子供・大人）、ロウソク、小分け用ビニール袋、電池（単2・4）があげられており、備考欄に「道路の片付けを早急に願う」とある。また、資料「避難所調査書　H23・3・23」をみると、花輪農村文化伝承館には60人が避難していた。炊き出しは当番制で台所を使用してやっており、炊き出しのための用具は「一応足りている」という。スタッフや住民らが置かれていた状況をうかがい知ることができる。

3　地震津波の語り

(1)　概要

以下では、高浜・金浜の人々が東日本大震災をいかに経験したかについて考える。震災の局面をおよそ3つ（地震津波の当日、翌日以降、将来）に分け、それぞれの局面において個別のテーマを設定し、人々の具体的な語りを紹介しながら検討を加えていく。

管見では高浜・金浜の住民による震災に関する回想が掲載された文書として、体験談集『平成24年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』（宮古市公民館、平成25年3月）と、船越恭治氏による『東日本大震災発生からの20日間（生命を求めて）』（平成27年10月1日）、そして住民インタビューが掲載された『広報みやこ』NO．151がすでに刊行されている。これらに加えて、筆者は、2014年8月に高浜・金浜の住民から5回にわたり話を聞き、それを記録した（注 体験談の詳細は第6章の最後に番号と頁数で示した）。

以下では、住民による震災についての語りを取り上げるが、それらを高浜・金浜における震災の経験という視点で整理し、震災の局面をおよそ3つにわけ、それぞれの局面で個別のテーマを設定し、具体的な語りを紹介しながら検討を加えていく。具体的には、まず1つめは

時系列により3局面（①地震津波の当日、②翌日以降、③将来）に分け、2つめで個別のテーマについて記述していく。①地震津波の発生当日における経験は特異であり、まずはその衝撃や混乱の様子を当事者の語りから記述する。語りや回想文を原型に近いかたちで記述し、それらに考察を加え、さらに個別に扱うべきと考えられるテーマを述べてゆく。②地震津波の翌日から語りや回想文が記録された時点までは、地震津波の直接的な衝撃や苦痛がまだ大きい段階から、次第に落ち着きを取り戻していく比較的長い期間であり、語りの全体的な傾向として、当初は時系列に沿って語られるが、次第に捜索、避難所の生活、家族、仕事など多様な個別テーマについて語られるようになっていく。そのため、まず時系列に沿い、続いて各テーマに沿った記述を行い、最後に考察を加える。③将来については、地域社会、人間関係、地震津波への備えなどといった個別テーマとして語られているので、そうしたテーマに沿って記述し、考察を加える。

(2) 地震津波の当日

震災当日についての人々の語りのほとんどが、地震が発生した当時にいた場所から避難している。ここでは、（ア）自宅やその周辺から、すぐに避難した例、（イ）自宅やその周辺から、混乱しながらも避難した例、（ウ）自宅やその周辺で、逃げ遅れてしまった例、（エ）金浜で働いていたり、たまたまいた人の例、（オ）地震発生時に他所にいて、避難・帰宅した例の順で語りや回想文を引用し、それぞれ検討を加える。

ア　自宅やその周辺から、すぐに避難した例

地震が発生したのは平日の午後、仕事をしている人もいればお年寄りは自宅にいることも多いと思われる時間である。まずは、地震後すぐに避難を開始し、比較的スムーズに避難を終えたケースをみていく。

■仕事をやめ、すぐに高台に避難した

宮古漁協高浜水産研究センターで仕事をしているときに地震がきた。私のほかに2人若い人がいるが、長くてふつうの地震ではなかったため、もうやめろと、もう仕事はやめろと言い、私の車でいま高浜仮設住宅が建っている近くの高台に逃げた。そのうちに潮が引いていき、おそらく地震の40分後位に喫茶店「異人館」近くまで潮が引いていった。80歳過ぎの男性が、自分はチリ地震の津波も見ているがここまでひどくはなかった、こんなのは初めてだ、だからすげえのが来るって言っていた。それで案の定、すげえのが来て、その高台から自宅のある金浜が見えるが、堤防から水が越えるのがわかった。金浜の自宅に父親がいるので、逃げることができただろうかと思った。…高浜の他の住民たちもみんな高台に行っていた。避難場所ではなかったが、すぐに車で上がれるため、高浜小学校ではなくて高台に行ったのではないか。高台には20～30人くらいおり、お年寄りが多かった。漁協のみんなも逃げ遅れた人はいなかった。その晩、漁協の誰かの知り合いの家に5人ぐらいで泊めてもらった。石油ストーブで暖をとり、ロウソクで灯りをとった。余震が激しくてあまり眠れなかった。真っ暗で波の音だけが聞こえた。（聞き取り3、金浜在住高浜勤務）

■すぐに自宅から近くの空き地まで避難した

姪と自宅で話していると地震。私は足が不自由なので、姪に戸を開けてもらい一緒に庭に出た。そこは車庫の上のコンクリートなので割れるかもしれないと思い、近くの空き地まで這って行った。家が崩れたらここに居ても下敷きになると思い、とても不安だった。…／寒かったので、揺れが収まってから姪にシートやダウンを持って来てもらった。ストーブも消すように頼んだが、既に停電で消えていたようだ。今回皆がえらいと思ったのは、「この地震では津波が来る」と判断した方が多いと聞いたこと。／地区の指定避難場所は自宅より下の公園なので、私は訓練に1回も出たことはない。あの日は下から来た20人位が避難しており、車も30台程並んで通れないくらいだった。／海を見ると工事用の台船が引き波でサーッと流れていくのを見た。あんな重いものが笹舟のようだった。「来た来た！越えた、堤防越えた！」とい

う声や避難している人達の悲鳴のような何とも言えない声がした。忘れられない声だった。（体験談1、高浜）

■避難場所へ息子に車で運ばれた

息子が消防団で、車で乗せられて、あれ持っていかねばこれ持っていかねばと思っていたが、高台に上ってから家にものをとりにいった人は見なかった。よかったのは明るい時だったってこと。海の状況もそこから見えたから、あれを見ていたら戻らないね。（聞き取り5、高浜）

■すぐに高浜小学校に避難した

自宅で昼食後、一休みしていたら地震。心配で家から出たり入ったりしていたが、揺れがとても長かったので津波が来るような予感がした。／一緒に居た孫から「逃げよう！」と言われたので2人で逃げた。／…バッグ1つとラジオ、コートを持ち、いつも避難する高浜小学校に歩いて向かった。小学校には歩いて5分もあれば着く。／校庭にも沢山人が居た。児童は、裏山に登ったという。津波は国道45号線まで上がり、消防団から「もう少し上がれー！」と言われたので更に上まで上がった。分団の方から「老人福祉センターに入ってください」と指示があり、行ってみると人がいっぱいだった。（体験談3、金浜）

■何も持たずに高浜小学校に孫を迎えに行き助かった

自宅で地震。外に出たりしていたが、2人の孫を迎えに夫と高浜小学校に向かった。地震直後、何か物を取りに家に入ろうとしたら夫に「命と孫が大事だ！」と言われたので何も持たずに車に乗ると、夫はいつの間にか家に入ってたばこを持って来ていた。やはり地震が大きいので大きな津波が来るかもしれないとは思っていた。／小学校に着くと学校から「今日は児童を帰しません」と言われた。どうしようかと思ったが、「老人福祉センターに上がりなさい」と聞いたので上に避難した。／孫を迎えに行ったのが良かったと思う。家を出る時は、孫を自宅に連れ帰らなければという気持ちだけで行った。今でも夫と、「孫らに助けられたな」と話している。（体験談8、金浜）

高浜には漁協の施設があり、「聞き取り3」は金浜在住だが地震発生当時は高浜の漁協施設で勤務していた事例である。地震が起きてすぐ、作業をやめるよう指示し、車で最寄りの高台に避難している。全員無事に避難しており、その過程に迷いや混乱はみられない。足が不自由であるという「体験談1」も、地震の後、迷うことなく屋外に出て、安全な場所に避難している。「今回皆がえらいと思ったのは、『この地震では津波が来る』と判断した方が多い」という表現も決して誇張ではない。後にみるように、高浜の住民は震災以前から熱心に避難訓練を行うなど、全体に防災意識が高かったことから、迅速に避難できた人が目立つ。また、これも後にみるが、津波の前に消防団がポンプ車で高浜を巡回し避難を呼びかけたことも影響していると考えられる。さらには、津波そのものも金浜と比較して小さく、これら諸々の要因が重なり被害が小さくなったと考えられる。

他方で金浜の「体験談3」をみると、結果として避難しているものの、地震直後は避難するかどうか逡巡している。「いつも避難する高浜小学校に歩いて向かった」とあり、避難訓練に参加していたが、いざ地震が起きてみるとなかなか決断ができなかったことがわかる。「体験談8」も同様に、すぐ避難に踏み出せず、家から出たり入ったりしている。「孫を迎えにいく」という名分がなければ、ひょっとすると避難しなかったかもしれない。他にも、金浜では当初避難をためらったケースが多くみられ、それによっても被害が拡大したと考えられる。

イ　自宅やその周辺から、混乱しながらも避難した例

地震の発生時に自宅やその周辺にいた人のなかには、避難したにも関わらずそこに津波が到達し、あるいはさまざまな事情により避難に時間がかかり、混乱の末に間一髪で難を逃れたと語る人も多い。とりわけ金浜において、避難できるかできないか紙一重であったケースが数多くみられる。ここではそのような、なんとか助かったケースをと

りあげる。

■江山寺の裏手に避難したものの流されかけた

金浜の自宅に1人で居て地震。表に出ると、2回目の揺れで戸が勝手に開きだしたので、こんなに力があるのだなと驚いた。余震が続いていたが、家の中に入り戸のカギを掛け、腕輪、時計などを取り出した。高い所に置いていた鉢植えが落ち、絨毯が土だらけになったのを見て、帰ってきて掃除するのが嫌だなと思い、隣の部屋の鏡台を割れないように下に伏せた。／3月3日の避難訓練には毎年参加していた。大きな避難リュックには、袋を3つ、はおれるもの、懐中電灯、サンダルを入れていた。その他、野宿なら寒さが大変だと思い、綿入れとコートを持って外に出た。家を出た時、放送で「3メートルの津波が来る」と聞いたので、「金浜の堤防は5、6メートルだから戻れる」と思った。一緒に避難しに来た知り合いは薄着だったので、「もっと厚い服を持って来て」と一旦帰った後、一緒にいつもの避難所である金浜の江山寺の後ろに行った。そこには5、6人ぐらいは来ていた。／疲れたのでその場に腰を下ろしていると、真っ黒い津波が見えた。津軽石と赤前の堤防を何倍もの高さで越えて、テレビや記録映画でも見ているような感じだった。そうしているうちにバリバリと板が倒れる時のような音がして、見下ろすと自宅に2、30センチ水が入ったなと思ったらすぐに倒れた。津波は勢いがある。「ここに居ても危ないからもっと上に逃げよう！」という声がしたので一緒に逃げた。上の線路や道路に行くには、お寺を降りて少し下に下がらなければならず、私達が宮古道路に移動した後、通った道に屋根が流れて来ていたので危機一髪だった。（体験談12、金浜）

■津波など来ないと高をくくり、夫に怒鳴られて避難した

夫、次女と3人で自宅にいると地震。夫に「地震だ、逃げろ！」と言われたが「大丈夫、津波は来ないから行かなくてもいいよ」と家の中に居た。すると夫に「小馬鹿もの、何してんだ！逃げろ！」と怒られたので、準備をしに2階に上がるとテレビが落ちていた。仕事が休みだった娘に「大きな津波が来るかも知れないし、どうなるかわからないから着替えして」と言い、逃げる前に台所のドアを開けた。夫もガスを止めて一緒に近くの江山寺に上がった。貴重品は全部持って逃げたが、こんなに大きな津波が来るとは思っていなかった。／お寺の人が「水が引いた！引いた！」と言うので、見に行こうとお墓に上がった。間もなく、「あー堤防を波が越えた！」という声がして、ゴーゴー、バリバリという音とともに一瞬のうちに何も無くなった。泣きながら「家が！家が！」と騒いで半狂乱になった私をどうしたらいいか困ったと後で娘に言われた。…自宅が流される前、長女が市内の会社から車で自宅に駆け付けた。…次女が「大丈夫、来ないよ」とのんびり歩いていたので、「何やってる！早く歩け！」と怒ったようだ。（体験談9、金浜）

■ものを取りに高台から下り、逃げ遅れかけた

山と麓に2軒自宅があり、山にある明治に建てた古い家に居る時に地震。電信柱が動き、周りの木も倒れそうなすごい揺れだった。ガラスの木戸はなかなか開かず、ようやく外に出た。揺れが落ち着いた頃、食料や水などを持ち先祖代々の物を取りに麓の家に下った。その時は、倒れた物で道路が塞がっては大変だとばかり考えて、津波のことは全く頭になかった。／途中で高台に避難する知人に会い、少し話をしてそのまま下ったので、すれちがった方は、後で私を心配したらしい。江山寺の入口で「はてどっちを廻ろうか、国道に出ようか？」と迷っているうちに波が堤防を越えるのを見た。船が乗った黒い波がガッパリ口を開けて、知り合いの家々を飲み込んだ。見ているとお寺の鐘つき堂が倒れて、これはだめだと思い、歩いたのか這ったのか、お寺の観音様の後に上がって見たら下が海になっていた。すごかった。／本堂には車が突っ込み、驚いて腰が抜けて骨堂に座り込んでしまった。お寺の位牌堂の2段目ぐらいまで波が来たようだ。近くにいた男性は「何が起きたか」と男泣きに泣いていた。骨堂裏から道路に上がり、麓の家に居るはずの夫を待っていたがとうとう登ってこなかった。（体験

談5、金浜）

■避難するか迷っているうちに逃げ遅れかけた

昼寝をしていた。下からの揺れを感じて地震だなと思った。私の家はあまり揺れなくて冷蔵庫の上の紙袋が1枚落ちただけだった。／余震があるのでテレビを押さえながら、妹と娘と3人で炬燵に入っていた。その時、誰かに声を掛けられたような気がしたので外に出たが誰もいなかった。すると前の家の奥さんだったようで、「これ、逃げねえすか」と声掛けに来た。それでこれは津波が来るから逃げようと思ったが、妹は「ここまで来ないよ」と言って逃げようとしなかった。／呼びに来た奥さんが「津波を見た事が無いからそこに上がって見よう」と言うので、一緒に線路に上がり海を見ていると藤の川の方に黒い波が見えた。誰かに「津波が来た！降りろ！」と言われ、妹を1人残していたのが気にかかり家に向かった。／途中で転んだりしたが何とか家に着き、「津波が来たから逃げよう！」と言うと妹は「それなら逃げようかぁ」という調子だった。バタめかず、腰が抜けたのかもしれない。そうして2人で走ったが、途中でまた転んでしまった。そうこうしているうちに後を見たら、波が線路を越えていた。私は急いで走ったが、首まで水に浸かりようやく何かに掴まった。でも、妹は帰らぬ人になってしまった。体格もよかったので逃げ遅れたのだろう。／やがて波が引いたので、「あー自分は助かるなー」と思った。おそらく足が土についていたのだと思う。そうでなければひき波で流されただろう。／上で見ていた人達は、2人とも流されたと思ったそうだ。水に浸かりながら後を見ると自宅が動き出していたので、「妹は流されたし、家も終わりだな」と落ち込んだ。／…今回私は、あまり揺れを感じなかったので、近所から声を掛けられなければ家に居たと思う。津波が線路を越えるとは思わず、波を見ようと井戸端会議をした事も時間ロスだった。そのまま上に逃げれば良かったが、妹を1人残すわけにもいかないと思い自宅に戻ってしまった。（体験談7、金浜）

■逃げるか迷い、話しているうちに逃げ遅れかけた

大きな地震が来て、「これは大変だなぁ、でもなぁ」と思っているうちに揺れが収まった。近所の方3人で「地震が大きいから、ガスの元栓だけは閉めよう」と閉めた。／しばらくしてまた余震が来た。2回目の揺れで電気が消えたと思う。…あれ電話かなあと受話器を取ると、中国にいた次男から「お母さん！中国で日本の東北に3㍍の大きな津波が来ると言っているから早く逃げろ！」と言われた。…「中国では大きな津波だと騒いでいるよ！」と言われたが、「3㍍といっても堤防もあるし」と思っていた。／息子に逃げろと言われたので、救急リュックを取りに2階に上がろうとしたが、揺れでなかなか上がれなかった。この揺れでは、本当に津波が来るかもしれないと思い、通帳や印鑑などを入れたバッグを持ち、孫に会った時のためにと仏壇の前で先祖代々の物は持たずにおやつだけリュックに入れた。なるべく厚着をして、そばにあった綿入れを持って近所に声を掛けたらもう誰も居なかった。これでは大変と慌てていたら、外では長男が会社から戻ってのんきに車を洗っていた。私が逃げる時に洗い上げていたので「津波が来るというから逃げよう」と言うと、「寒いから着替えをするので、待って」と家の中に入ってしまった。私は、待っても居られないと思い、逃げたのが良かった。息子は、体力があるので、波が来ると柵を越えて真っ直ぐ三陸縦貫道に上がっていた。危なく波に追いつかれる所だったそうだ。／私が逃げる途中で、上に避難している人達が騒いでいた。何を騒いでいるのだろうと思いながら、ゆっくり歩いていると「来たよ！来たよ！早く逃げなさい！」と言うので後も見ないでそのまま上がった。後を見たら家が無かった。息子も津波に流されただろうと思った。／柵を越えた息子は、材木と一緒に手を上げて流れて来た男性の腕をつかまえて助けたそうだ。とても大変で、離そうかとも思ったらしいが、助けてやれば良かったと後で後悔すると思い、何とか引き上げたそうだ。…内蔵破裂だったが、盛岡の病院で助かったそうだ。／長男は、私に「待って」と言った事がとても心配になったらしい。流されただろうと思っていたので、道路の上で再会してお互いを喜んだ。／

近所の夫婦も2階に上がったまま家と一緒に流れてきた。そして1回目の波が引けた後、窓から顔が出たので、「だめ、だめ、後1回大きな波が来るから早く上がれ！」と息子が声を掛けた。ずぶ濡れだったが、2人とも引き上げて助かった。（体験談11、金浜）

■高台の畑に避難したものの流されかけた

自宅に1人で居て地震。階段の辺りにいて、余震の度に外に出たり中に入ったりしていた。その間に時計やラジオ、薬などを持ち出し、ご先祖様も背負って外に出た。それから自宅近くの昔避難所としていた高台の畑に向かい、親戚らと5人でいた。／上から見る波は黒かった。2回目の波が堤防を越えたのでこの畑まで来ると思い、皆で走り上がったが3人遅れて亡くなった。（体験談4、金浜）

■近所に声掛けしているうちに、逃げ遅れかけた

帰宅後に地震。家の中の物を押さえながら揺れが落ち着いた時に外に出て道を下った。近所の奥さんには「何、この間も波が来ないから逃げなくても良いが」と言われた。／私の周りの家は、日中1人で過ごす人が4、5人居る。普段から交流があったので、さっきの地震で皆が腰を抜かしているだろうなと思い全員に声を掛けた。自宅に戻る途中で知り合いのおばあさんに声を掛けると「おめさんに声掛けられて良かったが」と出て来て、別のおばあさんと世間話が始まった。私は「寒いから家に戻るね」と言い、上着を取って家の前の道路に上がったら、津波がダダダーッ！と来て「あれ、何？」と言う感じだった。だから堤防を越えてくる津波を見ていない。その前に近所の方が家の前を車で逃げて来たので「何で逃げて来たのかな？」と思っていたら、その後波がワーッと来た。／いつも「自宅に津波が来たら全滅だ」と言われていたし、自宅はわりと高台にあったので逃げるつもりはなかった。下に留まっていれば私も流されたと思う。おばあさん2人は亡くなった。5人ぐらいに声を掛けたが1人だけ助かり、後は皆だめだった。（体験談13、金浜）

■夫とともに死のうと決意し、すんでのところで助けられた

自宅で地震。一緒にいた夫は2度脳血栓を患ったため、右半身に後遺症が残り不自由であった。／私は先ず戸を開け、…家から出たり入ったりしていた。横になっていた夫は起き上がろうとせず、「お父さん、皆が逃げたようだから逃げよう!!」と言っても返事をしない。3、4回言っても何も言わない。／夫は普段から「俺はこんな病気になって生きていても何も良いことが無い」と言い、私はその度に「そんなことはない、今はこんな病気が多いのだから自分だけじゃないんだよ。」と励ましていた。そのことを思い出し、夫は多分家と一緒に逝く気だなと感じた。／何も言わず横になっているので私は考えた。その時、70までも生きたし、1人寝ている夫をここに置いて自分だけ命があっても生き地獄だろうと思った。目に焼き付いてきっと命があるよりも辛いだろうと思った。短い時間に決断しなければならなかった。「よし、夫と一緒に逝こう」と決めた。死のうと思ったから、荷物を持つ必要もなく、何にも手をかけずに炬燵に入っていた。／周りはどんどん車で逃げる様子で、私達夫婦だけがポツンと残ったような感じだった。「どんな形で波が来るのかな、波に家が浮かんで段々水が入って来て沈んでいくのか、それもいいか」と思っていた。／…すると、宮古橋付近で仕事をしていた孫が吹っ飛んできた。「何やってるんだ！多分こうだと思った。逃げていないだろうと思ったら本当に居た！」。／私が気づいたら、夫は既に助手席に乗せられていた。急な展開で私の気持ちは元に戻れず真っ白で、何だろう何であそこに座っているのかという気持ちだった。「何やってる、もう津波がそこまで来てるんだから早く乗れ！」と言われたがそれでも理解できなかった。切り替えがきかないものだ。それからああ逃げるのかと思ったが、孫があれこれ持って来いと言っても手に着かなかった。ただ、…毛布を2つ車に投げ込んだ。／孫に乗せられて老人福祉センターに行く途中で何故か降ろされた。高浜小学校とセンターのどちらに行くか迷っている車や人で道路がごった返しだったため、孫は「交通整理をしてくる！」と行ってしまった。それで夫とセンターに歩いて向かうと「更に上の山に上がって下

さい」と言われた。急階段で大変だったが若い人の助けもあって何とか上がった。（体験談6、金浜）

■岬で津波を見ていて逃げ遅れかけた

津波当日は埠頭のところで仕事をしていて、地震が来ていちど家まで行き、湾に突き出た岬で波が引くのを見ていた。津波が来る前には高浜のほうまで海底が見えた。来たのは黒い波だった。湾の入口の方向に見える近くの堤防のところで大きな船がひっくり返ったのを見て、近くの高浜小学校へ車で上がった。老人福祉センターの手前に車が2台逃げていたが、前の方の車に乗っていた女の人が波を見て車を置いて逃げてしまった。ぶつけるわけにもいかずどうしようかと思っていたら水がどんどん入ってきた。降りることができず車の中にいて、そのまま少し流されて、浮いているトラックなんかとドーンってぶつかってきた。車で高浜小学校に避難した人はグラウンドに入って停めて、小学校の校舎の裏の山に登った。（聞き取り4、金浜）

■高齢の義姉と高浜小学校の校庭で流されかけた

地震の時は自宅に居た。かなりの揺れでテーブルに掴まったまま動けなかった。天気が良くて昼寝の後に干していた洗濯ものをたたもうとしていたら地震だった。落ち着いてから、また洗濯ものをたたみ直した。…／「大きい津波が来るから高い所に早く逃げなさい」と放送があったので娘と義姉と3人で車に乗った。その後の放送はぷっつり消えた。／夫は、家の前で作業をしていたので放送を聞くとすぐに自宅後ろの高台の畑に上がっていた。私が外に出て避難する時に上に居る夫に「高浜小学校行くべす！」と騒いだが聞こえなかったようだ。高台にいるので大丈夫だと思って置いて逃げたがそのまま亡くなってしまった。まさかあの高さまで波が来るとは思わなかった。／車で高浜小学校の校庭に上がり、沖を見ているとあさり掘りをする時のように海に水が無くなっていた。私は、まさかこんな津波が来るとも思わず、「あさり掘りが出来るなあ」と言った。そうしているうちにいつもの波が来た。あら、きれいな水だと思っていると、次に来たのが真っ黒い泥水と何処を通ってきた水なのか、がれきが混ざっている波が来た。家が流れて皆パラパラに壊れていた。「あー流れた、流れた」と言っているうちにやはり校庭にまで波が来た。／娘は先に山に上がっていて、私は直ぐに逃げる事ができず、どうしようもなかった。波がひざまで来る中、91歳になる義姉を連れて逃げた。辺りの人から「走れー！走れー！」と言われたが、高齢の姉を連れて逃げるのは大変だった。本当に心細かった。ようやく引っ張って歩いていたら途中で転んでしまった。起こそうとしたら波が来て倒され、老人福祉センターの山にぶつかった波の勢いでまた反対側に倒れて、すっかり頭からびしょ濡れになった。姉とはずっと手を繋いで、波で転んだ時も水を飲まないように口や鼻を押さえていた。／学校の校庭には、沢山の車が来ていたのに辺りを見たらそれまであった車や人が誰もいなくなっていた。騒いでも何も聞こえなかった。児童も校庭の端に丸くなっていたが、先生の一声で山に上がったようだ。2人だけ残って「あー終わりだな」と思ったら力が抜けて全然動けなかった。…／しばらくして、上の方から若い人達が2人水を漕いで走ってきた。姉を引きずって山に逃げてもらった。自分もそのまま山に上がり、また波が来るかと思い、暗くなるまで山にいた。下着や布団を借りて姉を寝かせたが、私も体中濡れて寒かったので、一晩寝ないで過ごした。（体験談10、金浜）

■防潮堤下の作業小屋に下り、逃げ遅れかけた

地元の床屋で散髪を済ませ家に向かおうとしたとき電柱が大きく揺れた。「いつもとは違う」。津波を覚悟し、急いで防潮堤のすぐ下にある作業小屋に向かい、網などの漁の道具が入ったかごを持ち出す準備をしていた。湾内の海水は底が見えるほど引いていった。間もなく対岸の白浜地区で白い波しぶきが空高く上がり、次に高浜を襲うのを目にした。金浜は白浜からの跳ね返りの波と沖から直進する波が合わさって盛り上がる場所。高台へ急ぎ、間一髪助かった。（体験談16、金浜）

以上、11の語りを引用したが、どれも緊迫した内容であり、一部には逃げ遅れてしまった人の話も含まれている。最初の3つが江山寺付近に避難した例、次の4つが線路・三陸道やその付近の畑などに避難した例、さらに次の3つが高浜小学校付近に避難した例、最後の1つが不明の例、と分けることができる。

まず、江山寺付近に避難した人たちの例を検討する。南北に細長い金浜のちょうど中心に位置するのが、小高い丘の中腹にある江山寺である。「体験談12」は、毎年避難訓練に参加し「避難リュック」を用意しており、落ち着いて避難行動をとることができている。江山寺の後ろに上がり、すでにいた5、6人とともに腰をおろしたことで安全は確保できたはずであった。しかし実際にはそこまでも津波が到達しそうになり、三陸道に移動することに決めたが、それには一旦少し下に降りなければならず、危機一髪で間に合った。避難したにも関わらず、予想を超える津波が来襲し、危うく飲みこまれそうになったのである。金浜は津波の浸水高が高く、このように、避難したにも関わらず津波に巻き込まれかけるという状況が生じた。次に「体験談9」は、当初津波など来ないと高をくくり、夫に怒鳴られてようやく避難を始めている。やはり江山寺に避難し、お墓から津波を見ていた。呑気に構えていた次女も長女に叱られて避難しており、家族同士で声をかけあうことが、安全に避難するうえで重要であることがわかる。「体験談5」は、高台にいたにも関わらず、ものを取りにいくために下り、江山寺の入口で津波が堤防を越えるのを見て、慌てて観音堂の上に上がり、難を逃れた。その近くには別の男性もいたとあり、江山寺付近には相当数の人が避難していた。江山寺付近は周辺に住む人たちの避難場所となっており、実際そこに避難した人は相当数いた。しかし、本堂、鐘つき堂、位牌堂など江山寺の施設の一部が津波に襲われており、その場所は安全ではなかった。そのまま江山寺付近に留まった人もいれば、危険を察知してそこから少し下り三陸道に上がった人もいたが、いずれにせよ、間一髪で助かっている。想定を越える津波が押し寄せ、訓練通りに避難した人でさえ、危険にあうのだということがわかる。

次の4つは線路・三陸道やその付近の畑などに避難したケースである。「体験談7」は、混乱の末なんとか助かったものの、妹が逃げ遅れてしまった。当初はさほど切迫しておらず、近所の人の声かけにより腰を上げたものの、避難というより津波の様子を線路の上に見に行ったのであり、津波が見えてから、逃げようとしない妹を迎えに再び自宅に戻り、結果として2人とも津波に浸かり、妹は亡くなってしまった。「体験談11」も、当初は避難するか逡巡しており、近所の人との話し合いと次男からの電話でようやく避難を始め、引き止める長男をおいて三陸道へ上がり、すんでのところで助かっている。本人も呑気だが、長男は地震の後も洗車しているなどさらに切迫感が欠如しており、結果としてぎりぎりのところで助かっている。「体験談4」は「体験談12」と同様、津波が来る前に避難を終えていたにも関わらず、そこまでも津波が押し寄せ、逃げ遅れかけた例である。実際、そこにいた5人のうち3人が逃げ遅れて亡くなっている。「体験談13」は、近所のお年寄りに避難を呼びかけているうちに逃げ遅れかけた例である。声かけをしたものの、その相手は逃げなくてよいなどと言って、他の人と世間話を始めるなど切迫感がなく、結果として声かけした5人のうち4人が亡くなってしまった。本人はたまたま家の上の道路に上がって難を逃れたが、タイミングがずれていたら、同じように津波に巻き込まれていたと思われる。

さらに次の3つは、高浜小学校付近に避難した人たちである。「体験談6」では、身体の不自由な連れ合いが避難しようとしなかったため、自分も一緒に死のうと決意したものの、孫が駆けつけ高浜小学校へ連れていかれた。この場合、津波が来るという危険を理解しながらも、短時間のうちに「避難しないで夫と死ぬ」という決断をしたことが注目される。身に危険が迫ったとき、それを避けようとするのではなく、あえて死を決断する可能性もありうるのだということがわかる。「聞き取り4」は、岬で湾口から津波が押し寄せるのを見てから避難を始めている。車で高浜小学校へ避難したが、渋滞しており、押し寄せた津波に車ごと流されかけた。高浜小学校は高さが10㍍ほどあり、避難場

所に指定されていたが、校庭に1・5メートルほど津波が入っている。「体験談10」も、高浜小学校に車で避難した例である。校庭から見ていた津波がやがて押し寄せたが、高齢の義姉と一緒だったため思うように動けず、水に浸かり、ようやく助けられた。後述するように高浜小学校付近では避難誘導が比較的スムーズに運んだが、これらのケースをみると、多くの人と車でごったがえし、さらに予想を超えて校庭にまで水が押し寄せたことで、車のまま流されかけた人もいるなど、混乱が大きかったことがわかる。

このように、金浜では、避難したにも関わらず津波に襲われたり、避難に手間取り逃げ遅れかけた例が数多くみられ、混乱が大きかったことがわかる。高浜と比較して、押し寄せた津波が大きかったこと、避難訓練や防災意識など日頃の備えが必ずしも行き届いていなかったことから、被害が拡大したといえる。

ウ　自宅やその周辺で、逃げ遅れてしまった例

すでにあげた語りの中にも、逃げ遅れた人たちについての例がいくつも含まれている。まずは、金浜で逃げ遅れ亡くなった28人のうち一部についてのものと思われる、網羅的な語りを見てみる。

■逃げ遅れた人たち

若い人のなかには避難して戻って亡くなった人もいる。財布を忘れて戻って亡くなった人がいた。ある女性は車を親戚の家に避難させて、ものを取りに歩いて戻って、2階にいたところ流され、山側に流されて見つかり助けたが寒さなどで亡くなった。寝たきりの高齢者で亡くなった方もいる。奥さんが亡くなって、旦那さんが2階から屋根に上がって助かったという方もいた。平屋のなかで首まで浸かって助かって宮古道路に上がってきた人もいる。2階にいて避難せずに流されて亡くなった人もいる。立ち話していて流されて亡くなった男性もいる。（聞き取り4、金浜）

以下、一部すでに触れた例と重複するが、逃げ遅れてしまった個別の場合である。

■江山寺の本堂に避難したが、水が入った

今回の地震で私のおばが（江山寺の）本堂の中で亡くなっていた。膝が悪いから神社まで歩けなかったのではないか。そこで見たという人は、だめだそこは津波が越えると言ってから、その裏のほうへ上がっていったという。1週間位捜したが見つからず、息子が千葉から来て一緒に探して、結局自衛隊の人が見つけてくれた。本堂の中の後ろの柱のところで寄りかかるようにして亡くなっていたという。おそらく逃げることはできたものの、寒さで亡くなったのではないか。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

■宮古道路に上がるのが間に合わなかった

2回目の波が堤防を越えたのでこの畑（注：避難していた高台の畑）まで来ると思い、皆で走り上がったが3人遅れて亡くなった。そのうちの1人だと思うが、「おーい、おーい、おーい」と3回呼ぶ声が聞こえた。波が線路まで来ると思い、逃げるのに手いっぱいで、後を見ることができず上の山に走り登った。そして宮古道路に出て、階段を登り線路に上がった。私は道路にある階段の場所を知っていたが、親戚は知らなかったと思う。道路の階段がもう少し下にあれば皆が助かったかも知れない。（体験談4、金浜）

■近所に声かけしたが、世間話が始まり逃げ遅れた

近所の奥さんには「何、この間も波が来ないから逃げなくても良いが」と言われた。私の周りの家は、日中1人で過ごす人が4、5人居る。普段から交流があったので、さっきの地震で皆が腰を抜かしているだろうなと思い全員に声を掛けた。自宅に戻る途中で知り合いのおばあさんに声を掛けると「おめさんに声掛けられて良かったが」と出て来て、別のおばあさんと世間話が始まった。…下に留まっていれば私も流されたと思う。おばあさん2人は亡くなった。5人ぐらいに声を掛けたが1人だけ助かり、後は皆だめだった。（体験談13、金浜）

とりわけ金浜では、助かるか逃げ遅れるかが紙一重であったような例が数多くみられる。「聞き取り3」のように、避難したにも関わらず、足が悪かったため、予想を越えて大きかった津波に対応できずに逃げ遅れてしまったり、「体験談4」のように、やはり避難していたにも関わらず、階段の場所を知らなかったために押し寄せる津波から逃げきれなかった例もある。また、「体験談13」のように、津波が来るという切迫感がなかったために逃げ遅れた例もある。

なお、2011年5月22日、金浜の死者のうち19名の合同葬儀が磯鶏修道場でとり行われている（船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」）。

エ　金浜で働いていたり、たまたまいた人の例

金浜には三陸自動車道と国道45号線を結ぶインターチェンジがあり、その周辺を中心に、4階建ての「宮古温泉マース」のほか、自動車販売店3軒、コンビニエンスストアなど、商業施設がいくつもあった。地震・津波が起こったとき、それらの施設やその周辺、そして道路を走る車両には相当の人がいた。

■逃げられず亡くなったコンビニの従業員

金浜のコンビニ従業員だった30代のお母さん2人は、客がいて逃げられずどちらも亡くなった。そのうち1人は地元の人で、どこでもある話だが気の毒だった。消防団員が筏をつくって綱をつけて助けたという話もある。金浜は車屋が3軒あったから、津波の後、何百台もの車が流されてあふれていた。（聞き取り1、金浜）

■コンビニからマースに流れついた女子高生

ローソンに買物に来ていた親子が流されて、お母さんは亡くなったが、高校生の子どもは助かった。屋根にしがみついたまま、1回目の波で流されて、引き波で1回海まで行った。それで次の波でまた押されて戻り、たまたまマースにぶつかって、その拍子で転がって3階の床に着いて、非常灯めがけて進んで4階に行って、自力で助かった。（聞き取り4、金浜）

■看板にまで上がり助かったマースの従業員

マースに逃げた人はおらず、地震当時にいた客はみな帰して、残っていた従業員十何人かは、4階まで上がって最後は看板まで上がった。流されてきた女子高生も一緒だった。翌日、自分たちで老人福祉センターまで来た。（聞き取り4、金浜）

■三陸道に車が停まっていて避難してきた車が上がれなかった

宮古のほうから三陸道を来ると、金浜のカーブのところで海が見えるため、車を停めてそこで見ていた人がいた。それで下から来た車が、先が詰まっていて上がれず、それでやられた人もけっこういた。マースでタンクローリーがボイラー用の灯油をおろしてその帰りにローソンで休憩していて流された。（聞き取り4、金浜）

■三陸道をずぶ濡れの人が歩いてきた

道路（注：三陸道）に立っていると、ずぶ濡れのスーツを来た男の人が半泣きで線路を歩いて来た。その方は、自動車で津波に遭い、車ごと線路の法面に上がったので、「今だ！」と車から降りたそうだ。言葉の感じから、この辺の方ではないようで、次の駅まで歩く途中だった。私達は、宮古の鉄橋が壊れていることも知らず、線路沿いに行けば大丈夫だろうとそのまま分かれてしまったので今も気がかりだ。（体験談12、金浜）

大地震が起き防災無線で津波警報が発令されたにも関わらず、コンビニエンスストアの店員は営業をやめることができないという状況があった。推測するほかないが、本当に津波が来るかわからないから、あるいは客がいるから、という理由でそのまま店を開け続け、結果として店員も客も津波にのまれてしまったのだろう。他方、温泉施設マースの場合は、非常時のマニュアルが機能している。素早く客を帰し、従業員は4階に避難して難を逃れた。ただし、帰された客は果たしてみな助かったのか、という疑問は残る。

また、金浜で亡くなった方々のうち、金浜の住民以外のほうが、金浜の住民よりも多いという点は強調しておかなければならない。「金浜の住民で亡くなった人は28人だが、金浜で亡くなった人は70人ほどいると聞いている。買物していたり車で走っていたりした人が亡くなったのだろう。」（聞き取り4）。つまり金浜では、住民28人が亡くなった他に、実は42人もの、住民以外の方々が亡くなっている。その方々については、わずかな情報を除けば、ほとんど知ることができない。「聞き取り4」「体験談12」にあるような、たまたま通りかかって三陸道へ車で避難を試みて叶わなかった人がどれほどいたのか、そしてそれはどのような状況だったのか、詳しく知ることができない。本調査のように、特定の地域を対象としその（元）住民に話を聞くというやり方をとると、たまたまそのときそこに居合わせた人々については、断片的にしか知ることができないという点は、この調査方法の限界を示している。

オ　地震発生時に他所にいて、避難・帰宅した例

地震が発生したのは平日の午後、多くの人が仕事に出ている時間帯である。実際、高浜や金浜で得られる地震津波の経験についての語りの多くがお年寄りであり、高浜や金浜の住民のうち、働き盛りの年齢の人の多くが、勤務先で地震・津波に遭ったと推測できる。

■地震直後、藤原から高浜へ車で戻った

藤原にある勤務先の水産加工会社事務所で仕事をしていた時に地震があり、とても揺れたためすぐに車で帰途についた。地震後すぐに停電したため信号もついてなかったが、国道45号線はまだ通行できた。（聞き取り1、高浜）

■田老の職場から金浜に歩いて戻った

田老の水産加工関連施設の事務所で地震。…／車を流されたのでしばらく待っていると宮古に向かうという町内の方の車に4人乗せられた。16時30分近くだったと思う。途中、早稲栃の辺りで車が並んで動かなくなったので脇に寄せて皆で歩き始めた。常安寺の方に降りて横町の道路を歩くと高京前まで車が全部流れて来ていて通られない状態だった。間の道路も全部車で塞がっていた。サンダル履きなので歩くのも大変だった。宮古小学校が避難所になっていたが入ることは頭になく、知人の所で連絡が取れるか、自転車でも借りられるかなどと考えていた。

宮古小学校の角で他の人と別れ、知人の所に行くと停電のため真っ暗で誰も居なかったのでそのまま山口川沿いを歩き始めた。小山田橋を渡り、交通整理をしていた婦警さんに「金浜に行きたいが行けるか？」と聞くと「行けるかもしれないが、行かないほうが良いです」と言われた。…とにかく家に帰らなければというのが頭にあったので進んだ。途中で会った知人から「金浜の下の方は全滅だぞ」と聞き、まさか自分の家も？と思った。私は普段から「自宅まで津波が来るぐらいなら宮古自体が全滅だろうし、ありえない」と話していた。とにかく帰ろうと八木沢街道を歩いていたら、自宅に辿りつけずに職場に戻ろうとしていた近所の息子さんに出会った。私は裏道を知っていたので一緒に連れて歩いた。／宮古道路の下の細い道路を歩いて家に着くと、真っ暗だが家の格好は残っていた。着いたのは20時30分頃。3時間はかけて歩いたと思う。（体験談14、金浜）

■宮古の中心街から金浜に向かった

地震が発生した時は商工会議所で仕事をしていた。その瞬間、津波が来ると判断し、家族、中でも家にいる母親が心配になった。すぐに家に向かい、出会い橋、八木沢周りで金浜に近づくが、海水とがれきで近づくことができない。何とかして家を見たい、母親はどうなっているのかという思いで、線路に近い山際を通り家に近づくと、家は崩れ、海水の中で屋根だけがみえていた。真っ黒な渦の中に人や崩壊した家、泥まみれの家財道具、海から流されてきた漁船、カキ、ワカメの養殖棚、自動車などが浮き、まったく地獄絵図そのものに見えた。屋根の上で右往左往している近所の人を見つけ、周囲の人たちと協力して運よく

救助することができた。着替えをさせ、焚き火をして体を暖めた。母親は、地震後に友だちと外に出て立ち話をし、近所の人に「早く逃げて」と声掛けしたらしい。それ以降の母の情報は途絶えた。山田町でケアマネージャーの仕事をしていた妻が心配になり、夕方に山田町に行ったが、がれきで通れずあきらめ、金浜に戻り、軽トラックの中で一夜を過ごした。（船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」）

■山田町にいて、町内の避難所に避難した

地震が発生した時は、ケアマネージャーとして担当していた山田町の方の家で会議を終えたところだった。その家の家族に避難を促し、その他に2件安否確認をした後、自分も車で避難した。途中で津波に遭遇し、車を降りて慌てて小高い所まで走り後ろを振り向くと、大きな波が今まで乗っていた自分の車や他の車や木々や家まで全てを呑み込んでいた。何事が起きたのか理解できず、数分その場に立ち尽くしていた。山田北小学校へ誘導され、その晩は体育館で過ごした。とにかく寒く心が折れそうになる。金浜の家は大丈夫だろうか、不安が頭をよぎるが考えないようにした。（船越典子「二、家族の証言　（一）船越典子」）

他所で地震に遭った人々は、自身の身の安全のためにとりあえず避難するものの、その後は一様に家族を心配し、自宅に戻ろうと試みている。「聞き取り1」の例では、藤原の職場から自宅のある高浜まで比較的近かったことから、津波が来る前に車で戻ることができている。ところが「体験談14」の例では、職場のあった田老と自宅のあった金浜がかなり離れており、また宮古市街の手前で浸水のため車から降りて歩かねばならず、結果として3時間もの時間がかかっている。宮古市街にいた船越恭治氏の例でも、すぐに金浜に戻ろうとしたが、着いたころにはすでに津波が押し寄せた後であった。さらに、山田町で勤務していた船越典子氏は、車を流され、山田町の小学校体育館で不安な夜を過ごしている。地震津波の発生時にどこにいたのかにより、自分、そして家族や親しい人の安全を確保できるかどうかについて、大きな違いが生じたことがわかる。

(3) 避難に関する考察

ア　初動のあり方

■避難場所と避難所の概要

体験談や聞き取りをまとめると、高浜および金浜における、地震後の避難先を以下のようにまとめることができる。高浜の住民は、地震後、主として3か所に避難した。まず高浜地区の中心の山側に位置するコープケミカル住宅裏の高台空き地、次に地区の北東端に位置し後に仮設住宅が建設される高台の空き地である。地区の南西端、金浜との境界に位置する高浜小学校に避難した人もいたが、宅地からやや離れているため、少なかった。

金浜では、人々は大きく4か所に避難した。「金浜は南北に分かれていて、行き来するには（間にある）山を越えなければならない。おそらく南側の人たちは三陸国道のある山のほうに、北側の人たちは神社か、八木沢のほうへ上がっていくしかないため、そちらへ逃げたのではないか」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。これを含む複数の語りを総合すると、避難先は、まず地区の中心に近い江山寺付近、次に三陸縦貫自動車道やJR山田線の線路、金浜地区の北端に位置する金浜稲荷神社・高浜小学校・金浜老人福祉センター付近の高台、そして地区の西方面、八木沢方面へ抜ける道の先にある高台であったと考えられる。なかでも三陸縦貫自動車道付近と高浜小学校付近の高台に、多くの人たちが集まっていた。

■津波の来襲

高浜と金浜に押し寄せた津波とそれによる被害を、避難した人々はどのようなものと見たのだろうか。

まず高浜では、津波は湾口方面から入り、次いで引き波が高浜小学校方面から押し寄せた。「高浜では、津波は堤防の切れ間、信号がある

ところ（注：国道45号と旧道の交差点、高浜集落の北端）からガーっと入ってきた。ただし確かに堤防を超えたがそれほどではなかった。しかし高浜小学校の前あたりにぶつかった後の引き波が高浜に入ってきた。水門が壊れたところから水がたくさん入ってきたらしく、消防団の屯所があるあたりが一番ひどかった」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。「高浜の北側は防潮堤がないものの倒れた建物はなかったが、南側は建物がけっこう倒れて何も残っていないところもあり、近くの水門もひしゃげていた。消防団の屯所もそうだが多くは返し波でやられていた。水の逃げ道をつくってやらなければならない」（聞き取り1）。「（高浜の）いま仮設住宅がある場所に避難し、そこから金浜の堤防が破けたのを見たし、我が家の前に水門があるが、それが壊れたのも見えた。宮古の方からというより、引き波が運動公園のほうからわあっと来た感じがする」（聞き取り5、高浜）。最初に湾口方面から集落に入った津波はそれほどではなかったが、高浜小学校方向からの引き波はかなり大きく、被害も集落の南東部がより大きい、ということがわかる。

他方、金浜に押し寄せた津波はさらに激烈なものであった。「金浜では高浜小学校の近くですごい水柱が立ったと聞いている。津波と返す波がぶつかったのではないか」（聞き取り1）。金浜の津波がとりわけ激烈なものになったのは、2つの方向から波がぶつかったためであると考えられる。「早めに避難して老人福祉センターから見ていた人がいうには、センターから見える金浜の北側の集落の中で津波が渦巻いていた。宮古湾の入口の方から流れ込んできた津波と、津軽石のほうから戻ってきた引波が金浜でぶつかってとぐろを巻いたようだ。山側にあった家が海のほうに流されたり、海側にあった家が山側に流されていたり。水に浸かった家のほとんどが流されて動いていて、直して今も住んでいる家はわずかしかない。津軽石の水門を閉めたために、はね返ってこの辺で波がとても高くなった。法の脇や金浜はその水門のおかげで被害が大きくなった」（聞き取り4、金浜）。

また、2方向からぶつかった津波のうち、とりわけ強かったのは引き波だったようである。「高浜小学校のグラウンドへ入った波は津軽石の方向から流れてきた引き波で、その波は国道沿いに高浜の方まで流れていって、高浜の屯所のあたりもそれでやられた」（聞き取り4、高浜）。

地形、津軽石川の河口に設置された水門、そしてマース付近での防潮堤の決壊、それらが複合的に作用して逆流してきた引き波は、ちょうど金浜でぶつかりあい、津波浸水高が高浜の倍以上にあたる、11・38㍍にも達したのである。

■生死を分けた境界

避難が終わる前に押し寄せた津波は、一瞬にして多くの人の命を奪った。人々の語りの中でとりわけ目を引くのは、自分は避難できたものの、すぐそば、あるいはごく身近に逃げ遅れた人がいるという記述がいくつもあり、とりわけ金浜に多いことだ。逃げた人と逃げ遅れた人がほんの紙一重の違いのような状況が、そこかしこに、数多く存在したという事実に驚かされる。その、生死を分けた境界はどのようなものだったのだろうか。

まず、地域に共通した条件を確認しておきたい。地震の発生から津波の来襲までは約30～40分の時間があった。高浜や金浜は沿岸に集落があるが、最寄りの高台までの距離は、遠いところでも直線距離で200㍍程度である。30分で200㍍であれば、身体が不自由といった場合を除けば、十分に避難が可能であるように思える。防災無線は、途中で途絶えたが、少なくとも当初は全域に避難を呼びかけたはずである。しかし実際には、多くの人が逃げ遅れたり、逃げ遅れかけたりしている。

逃げ遅れずに済むか否かは、各々が地震発生時に置かれていた外面的な条件の違いによるものと考えることもできる。地震津波が起きたのは平日の午後であり、子どもは学校に、有職者は地域内外の勤務先に、高齢者は自宅にいることが多い時間帯である。当時高浜と金浜にいたのは、自宅やその周辺にいた人（多くは高齢者）、高浜小学校にいた小学生や教職員、また商業施設や作業場などで働いていた人、用事

でたまたま訪れたり通りかかったりした人などである。地震の発生時に、どこで誰と何をしていたのかは、当然ながら避難のあり方に影響する。

これまでみたケースに描かれた生死の境界には、これら外面的な条件だけでは説明がつかないものも多い。どこで誰と何をしていようと、この地域で大地震が起これば、人々は当然津波が来るものと考え、いかなるルートをとるにせよ、避難へと意識が集中するはずではないか。しかし実際のところ、以下の語りをみると、大地震が起きても、人々の意識は津波、そして避難へと直結するわけではないことがわかる。

「（注：地震の後、山にある家から麓にある別宅へ下りていく時）倒れた物で道路が塞がっては大変だとばかり考えて、津波のことは全く頭に無かった」（体験談5、金浜）。「これでは大変と慌てていたら、外では長男が会社から戻ってのんきに車を洗っていた」（体験談11、金浜）。「高い所に置いていた鉢植えが落ち、絨毯が土だらけになったのを見て、帰ってきて掃除するのが嫌だなと思い、隣の部屋の鏡台を割れないように下に伏せた。」（体験談12、金浜）。

これらの例をみると、大きな地震があれば津波が来て危ないということを頭ではわかっていても、まだ津波が来ていないときにそれを想像し、かつ避難行動に移すことは、現実には難しい場合がありうることがわかる。

さらに、周囲の人とのやりとりも、避難のあり方を大きく左右する。「体験談7」の女性は、「あまり揺れを感じなかったので、近所から声を掛けられなければ家に居たと思う」と回想しているように、地震の後しばらくは、たいしたことはないと考えていた。それが、隣人に声をかけられ「これは津波が来るから逃げようと思った」と思い直しており、第三者が後押しすることで、ようやく避難しようという気持ちになった。しかし彼女にとってより身近な妹が避難に同意しなかったことにより、引き戻されてしまう。後押しをした隣人とともに一旦高台に上るものの、その隣人もまたさほど切迫した様子ではなく、むしろ津波を見たいという興味のほうが勝っている。真に危険を感じたのはその後、自分たちに向かってくる黒い波を目の当たりにし、誰かに「津波が来た！降りろ！」と言われたときである。急激に気持ちが切迫し、途中で転びながらも家に戻り妹を急き立てるが、妹はまださほど焦っている様子ではない。なんとか妹を連れて走るが、津波に追いつかれてしまう。

以上をまとめると、地震発生時におかれていた外面的な状況に加え、地震津波についての当人の判断および対応や、同じく周囲にいた人の判断と対応が、避難のあり方に影響したといえる。地震の後、すぐに避難に移った人もいれば、大丈夫だと高をくくった人もいた。同じ家族のなかでも考えが一致しない場合もあった。揺れの大きさと継続時間、自宅など自分がいる場所の海岸からの距離、海面からの高さなど、地震津波の大きさをどのように見極めるかという問題に加え、過去に経験した地震津波の記憶、避難訓練に参加しているか否か、年齢や病気などからくる身体の（不）自由さ、寒さなどからくる動きたくないという気持ち、近所からの声かけ、一緒にいる家族に対する思いなど、さまざまな複合的な要因を、当人がどのように判断し、周囲の人と協調して避難できるかが重要である。それがうまくいけば、避難できる可能性は高まるだろう。

■防災無線が途絶えた

地震発生時、宮古市の観測所は、約１６０秒間、震度５強～５弱の揺れを観測した。気象庁は地震発生から３分後の14時49分、岩手県・宮城県・福島県に津波警報（大津波）を発令し、予想される津波の高さを３㍍としたが、15時14分には６㍍、15時30分には10㍍以上と、高さの予想が引き上げられた。当初、この津波警報は宮古市でも防災無線を通じて人々に伝えられたが、停電により途絶えてしまい、人々は津波の高さが当初の３㍍から大きく引き上げられていったことを知ることができなかった。

以下の証言をみると、このことが人々の避難を遅らせたり、人々に安心を与えて津波を見物に行かせたりしてしまった可能性があること

がわかる。「防災無線で3メートルと言っていたのを聞いた後、停電で防災無線が切れて情報がなくなった。10メートルの堤防があれば大丈夫だということになり、堤防に津波を見に行った。そこから津波が来て小学校に駆け上がった人もいる」（聞き取り4、金浜）。「防災無線から『宮古地方に20センチメートルの津波が来ました』と聞こえたが、それ以上の波が来るだろうと思った。…逃げている最中はその後の無線放送を聞いていない」（体験談3、金浜）。「『大きい津波が来るから高い所に早く逃げなさい』と放送があったので娘と義姉と3人で車に乗った。その後の放送はぷっつり消えた」（体験談10、金浜）。「近所の奥さんには『何、この間も波が来ないから逃げなくても良いが』と言われた。…『3メートルの津波』という放送は聞こえたが、3メートルは絶対越えないと思っていた。だから『何これ？』と言う感じで状況が飲み込めなかった。堤防が4メートルなので絶対堤防を越えないと思った。私は田老出身なので本当は逃げなければならないと知っていたが、その放送を聞いてしまったがゆえに絶対越えないだろうと思ってしまった」（体験談13、金浜）。

また、防災無線に対する慣れ、防潮堤があることからくる油断が、初動を遅らせた可能性もある。「それに何日か前の地震で10センチメートルの津波があったのでおばあさん達も油断して逃げなかったと思う」（体験談13、金浜）。東日本大震災の2日前、3月9日11時34分に起きた三陸沖地震・津波や（宮古市で震度4、岩手県で津波注意報が発令され、宮古市で津波の高さ10センチメートルを観測）、前年2月27日のチリ地震津波など、宮古市で地震や津波はさほど珍しいことではなく、むしろそのたびに聞くサイレンや放送に慣れてしまったことから、どうせ今回も大丈夫だろうという気持ちを起こさせた可能性がある。

さらに、サイレンや放送に緊張感がなかったという証言もある。「聞いた放送は『大津波が来ます、大津波が来ます』とゆっくりした放送で緊迫感がなく、はっきりは聞こえたが1、2回しかサイレンが鳴らなかったような気がする。放送の印象としては、波がピチャッと来るぐらいにしか感じなかった。／昨年のチリ津波の時の放送は、今回とは違って怖かった。サイレンがガンガン鳴って『津波が来ます！津波が来ます！』と聞こえ、これは座っていられない、逃げなくてはと感じた」（体験談1、高浜）。実際にサイレンや放送の声が変更されていたかは不明だが、ともかく緊張感のある放送であるか否かが、避難に影響を与えるということはいえるだろう。

イ　避難場所・避難所に関わる問題

■高浜の避難場所

高浜にいた人々は、地震の後、3か所に避難した。後に高浜仮設住宅が建てられることになる高台の空地、避難場所に指定されていたコープケミカル社宅の裏にある高台の空地、そして避難所に指定されていた高浜小学校である。このうち、コープケミカル社宅裏の空地における状況については、消防団第十一分団の分団長であった佐々木好栄氏による証言がある。

私は高浜のコープケミカル社宅の上にある高台の避難場所に避難した。避難所の高浜小学校へ行く道が通行できなかったため、結局そこに11～13日まで3日間いることになった。当初、67～68人がそこに避難しており、自主防災の倉庫や集会所もあったが、鍵を持っている人がそこに来ていなかった。仕方ないので社宅の集会所の1部屋を借りる了解を得て、窓ガラスを割り鍵を壊して、お年寄り19人に入ってもらった。最初の晩はそのほか倉庫に6人、資材置場に17人入ってもらったが足りず、屋外に26人があふれた。寒かったので、木材を集めて2、3か所で焚き火をした。社宅に住んでいる人の部屋から飲食物を持ってきてもらい、また私の家にも水が入ったが避難場所から近かったので、米30キロや調理器具を持ってきて、焚き火でごはんを炊いてみんなで食べた。お母さん方など女性が多く、知り合い同士も多かったが、たまたま通りかかって避難してきた人もいた。津波の水を被って低体温症になった子どもがいたが、その場に看護婦さんがいてこのままでは危ないということになり、母親と団員が3人で河南中学校まで山を越えて運び、救急車を呼んで助かった。中学校まで行って帰ってくるのに5時間かかった。他には避難所の高台に水をかぶった人はおらず、

車で流された人もなかった。地元の人たちの避難誘導は比較的うまくいったのではないかと思う。日が経つごとに人は減り、道路が通行できるようになったため、残った人も14日に金浜老人福祉センターに移動した。（聞き取り1、高浜）

この避難場所には自主防災の倉庫や集会所があり、地域の避難訓練でも避難先とされていたのであろう、避難所の高浜小学校へ移動できない、鍵をもった人が来ない、人が多く収容しきれない、子どもが低体温症になったなどの問題はあったが、それでも大きな混乱は感じられない。以下のような語りもある。「高浜の高台でも炊き出しをして、大きい鍋と、米もたくさんあって、野菜もある人たちがもってきて、すごいごちそうだった。団長さんの家でも米があるからって持ってきてくれて。他の消防団の方ももってきてくれた。薪はそのへんから持ってきた」（聞き取り5、高浜）。死者4人、全壊家屋165棟など、大きな被害が出ているにも関わらず、避難場所の統率がとれ、かなり適切に状況に対処できていた。

後に高浜仮設住宅が建てられる空地にも、大きな混乱はなかった。「高浜の他の住民たちもみんな高台に行っていた。避難場所ではなかったが、すぐに車で上がれるため、高浜小学校ではなくて高台に行ったのではないか。高台には20～30人くらいいた。お年寄りが多かった。漁協のみんなも逃げ遅れた人はいなかった」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。次の語りには「公園」とあるが、これがどこなのかは不明である。「地区の指定避難場所は自宅より下の公園なので、私は訓練に1回も出たことはない。あの日は下から来た20人位が避難しており、車も30台程並んで通れないくらいだった」（体験談1、高浜）。総じて、高浜の人々が避難した先は、金浜と比較すれば、混乱が少なかったといえる。

■金浜における避難場所の所在地に関わる問題

高浜と比較すると、金浜の避難場所や避難所は混乱が大きかった。金浜の中でも、高浜小学校、金浜老人福祉センター、金浜稲荷神社など、北部にある高台に避難した人たちが難を逃れたのに対し、金浜を南北に隔てている江山寺やその背後にある高台、さらにその背後にある三陸自動車道（三陸縦貫道）に避難した人たちの間では混乱がより大きく、この周辺で犠牲になった人が多かったと考えられる。

人びとの語りをみると、金浜における混乱の一因となったのが、避難場所の位置である。避難場所が高浜小学校とされていたが、金浜南部の住民は必ずしも十分に理解・納得していたわけではなかった。「以前、自治会から避難場所は高浜小学校だと言われて、高齢者は間に合わないからお寺じゃないかと意見したことがある。今思うと浜どころにいるので、もう少し避難場所について確認しておくべきだったと思う」（体験談9、金浜）。南北に長い金浜の沿岸地域のうち南部に住んでいる人たちからみると高浜小学校はやや離れている。実際に、江山寺裏手の高台のほうが近かったため、あるいはそこが避難場所であると認識していたため、そこに避難した人もいる（体験談9、体験談12）。金浜の南部に居住していた人々は、近距離で安全な避難場所が確保しにくい状況にあったのである。

また、避難先と考えられていなかった三陸自動車道に、多くの人が避難したことも混乱の一因となった。とりわけ、三陸自動車道沿いに設置されていたフェンス・金網が、法面から自動車道へ上ろうとした人びとの行く手を妨げ、そこで亡くなった人がいたことは強調しなければならない。「高速道路だから最初の入口のところからしか入れない。フェンスをよじのぼって助かった人もいるし、上れなくて亡くなった人もいる」（聞き取り4、金浜）。「三陸国道はフェンスがあってお年寄りはなかなか道路にでれなかったようだ」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。「当時、宮古道路には金網が貼られ、入れないようになっていた。それで皆上がれなかったようで、避難道路としての機能は不足していたように思う。後からお寺の近くの金網を誰かが切って入れるようにしたようだ。そこから道路に避難した方もある」（体験談4、金浜）。「いつも津波警報では、夫が逃げた自宅裏の高台に上がっていたが、そこで夫と近所のおばあさんら3人が亡くなった。普段からおばあさんも

杖をついてそこに避難していた。線路に上がれば助かるが、宮古道路に柵が出来たので、行くことができなかった。1か所しか入口が無かった。夫はそこの入口で亡くなっていた」（体験談10、金浜）。「宮古道路に出て、階段を登り線路に上がった。私は道路にある階段の場所を知っていたが、親戚は知らなかったと思う。道路の階段がもう少し下にあれば皆が助かったかも知れない」（体験談4、金浜）。他方で、若者の中には自力で金網を越えた者もいた。「息子は、体力があるので、波が来ると柵を越えて真っ直ぐ三陸縦貫道に上がっていた」（体験談11、金浜）。建設されたばかりの三陸自動車道は避難先として想定されていなかったが、現実には、あの状況下で、金浜南部の人々が避難するのに最も適していた場所だった。事前にそのことが認識され、法面から路面に出ることができるような措置がとられていれば、この場所での犠牲者は少なくて済んだと考えられる。

■避難所・高浜小学校の浸水と裏山への避難

江山寺・三陸道の周辺に比べると、高浜小学校の周辺は、混乱はしたものの、その程度は軽かったと思われる。震災時に高浜小学校の校長であった大洞晴洋氏によれば、小学校の様子は以下の通りであった。地震が発生した時、高浜小学校はまだ下校前で全学年児童が在校しており、地震の合間を縫って全員が校庭に避難した。小学校の校庭は宮古湾に面し、国道45号をはさんで10メートル以上の高台にあり、地域の避難所に指定されていた。いつしか校庭脇の駐車場には十数台の乗用車が入っていた。その多くは保護者の車であり、数名の保護者から「連れて帰ってもいいですか」ときかれたが、メガホンを持って、「警報が出ているので、もう少し様子をみましょう」と伝えた。これがその後の状況からとても大きな判断になった。そのうちに津波がやってきて、校庭周囲のフェンスから湾内を見ていた消防団員が「だめだあ。みんな、逃げろ！こっちだ。早く、早く」と叫び、児童を含む全員が校舎裏の高台を目指して走りだした。高台から見下ろすと、校庭には約1メートル半ほど津波が入っており、車が十数台浮かんでいた。その後も裏山のさらに高い所まで避難し、17時頃に山を降りて、金浜老人福祉センターに避難した。校舎は浸水しなかったが、ぎりぎりの高さまで津波が上がったので、体育館は避難所としては使用されず、福祉センターが避難所になった（大洞晴洋、平成24年：175頁）。

校庭に津波が押し寄せたにも関わらずここでは犠牲者が出ていないことから、保護者に児童を連れ帰らせずその場に留めるという大洞氏の初期判断は大きく貢献したといえるだろう。

裏山への避難は消防団員の一声がきっかけだった。消防団第十一分団の分団長であった佐々木好栄氏によれば、以下のような経緯であった。「当該分団の副分団長らは、高浜にある屯所から、ポンプ車で一旦、高浜の高台に避難したものの、海岸の近くに障害があるかなにかで動けない人が1人いるという情報があって救助に向かい、副分団長の判断でその人を乗せて高浜小学校へ避難した。高浜小学校の校庭に着くと、避難している人が50～60人位おり、やがて校庭まで水があがった。子どもや父兄はすぐ高台に避難して無事だった。校庭には子どもを迎えに来た車などが置いてあったが、流されて1か所に集まっていた。サッカーのゴールか何かに掴まって助かった人が1人いたという。小学校を避難所とすることができないということで、金浜老人福祉センターが急遽避難所になり、そちらにポンプ車も消防団員も向かった。消防団員が動けなかった人を助けたところ、助けてもらったと感謝し、後にその息子が消防団に入った」（聞き取り1、高浜）。

この判断やその後の避難の過程には、他の地域住民も貢献している。

写真１　避難所は震災後に金浜老人福祉センターなどへ変更された

2014/08/13　撮影：宮坂 清

学校支援隊として活動していた高浜のある男性は、児童の下校つきそいのため高浜小学校に行き、校長と話をしていたときに地震にあった。「普段、妻から津波のことを聞いていたので、地震直後に『津波が来る！』とひらめいた。それで『児童を外に出せ！校庭の真ん中に出せ！』と叫んだ。校庭まで波は来ないと思ったが、更に上の老人福祉センターに避難するように指示した。ただ、2通り道があるので『絶対下に降りるな、一番無難なのは、学校の裏山に逃げるのがいいと思う』と伝え、急いで帰宅した。あの時、自分が児童を引き連れて歩いていたら津波で全滅だったと思う。あと5分も違えば危なかったかもしれない。児童は裏山で助かったそうだ。校庭で津波にあった高齢者もあったという」（体験談2、高浜）。

このときに校長らに導かれ高浜小学校やその周辺に避難した（体験談3、6、10）、あるいは子どもを迎えに行ってそのまま避難して助かった（体験談8）という証言も多い。その際に「高浜小学校とセンターのどちらに行くか迷っている車や人で道路がごった返しだった」（体験談6）ともあり、当時多くの人や車が避難のために集まり混乱していた状況がうかがえる。人々は「センターに歩いて向かうと『更に上の山に上がって下さい』と言われ」（体験談6）、消防団員や校長らに導かれて避難した。ただし、「校庭で津波にあった高齢者もあったという」（体験談3）という証言もあるように、危うく逃げ遅れかけた人もいた。ある80代の女性は91歳になる義姉と校庭にいたが逃げ遅れて取り残され、波にのまれて転倒し頭からびしょ濡れになりながらなんとか難を逃れている（体験談10）。ただし、混乱は大きかったものの、多くの人や車が集まるなか、1・5メートルもの津波が校庭に押し寄せたにもかかわらず、逃げ遅れた人が出なかった。校長や消防団員、学校支援隊ほか、その場にいた人たちの臨機応変な対応が、多くの命を救ったといえる。

(4) 被災後の日々

ア 消防や自衛隊による捜索活動・支援活動

地震津波の翌日、街はまだ水に沈み、インフラは断絶し、情報は錯綜し、人々は疲労と悲嘆の極みにあった。そのような中、高浜と金浜を管轄する宮古市消防団第十一分団を中心に、本格的な捜索活動・支援活動が開始された。以下は第十一分団分団長である佐々木好栄氏の証言である。

3月12日朝、高浜の街はまだ水浸しだったため、朝5時半ころ、コープケミカル社宅の上の避難場所にいた消防団員4、5人で、水門を少しずつ、30～40センチずつ開けた。道路が通れるようになる前も防潮堤の上ならば歩くことはできた。高速道路が通っていたから金浜へは物資は比較的スムーズに運ばれたが、当初の高浜は完全に孤立していた。堤防の上もガレキで一杯だった。高浜では震災前に下水道の工事をしていたので、ちょうど重機が置かれていた。団員のなかに運転できる者がおり、道路を広げていいかと訊かれた。たくさん行方不明者がいれば傷つける可能性があるからできないが、高浜は行方不明者が少なかったので、やるかということになった。当初は国道には出ず、国道より内側だけを、見張りを含めて3人でやった。そのうちに国道へ出て藤の川方面に異人館のあたりまでやったら、向こうからもやってきた。案外開通するのは早かった。あのとき使った重機は鍵が挿しっぱなしだった。後で本を読んで知ったが、何かあったときのために鍵はつけておくのだそうだ。13日9時に国道45号線が開通した。14日からは自衛隊、北海道の旭川第2師団が来てくれて、朝、高浜小学校の校庭で対面式を行った。寒い中、よくやってくれた。最初は高浜と金浜どちらも入って捜索したが、高浜は3日ほどで捜索を終了し、金浜の捜索をその後も継続した。地元の町内会長、自治会長

写真2　宮古市消防団第十一分団屯所（高浜）
2014/08/13　撮影：宮坂 清

が来なかったので、分団長の私のところに、あれをやってくれこれをやってくれ、家主を探して許可をもらってくれというような依頼がきた。捜索が長引くだろうということで団員は4班にわけて順番に出ることにしたが、分団長の私は毎日出なければならなかった。消防団の袢天をみると安心するという人もおり、がんばった。捜索のときには屋根の上を歩かなければならないが、雪があるなどしてとても滑った。家を動かしているうちに見つかった遺体もかなりあった。遺体を見つけると自分たちで運んだが、いったいどうやって運んだのかよく覚えていない。江山寺も入口まで車が入りこんでいて、女性がリュックサック背負って本堂の中の柱に寄りかかった姿で見つかった。歴史の中でお寺のあそこまで津波が入ったことはなかった。お寺にいると陰になって、水が来たかどうか見えなかったのかもしれない。金浜の建物は激しく壊れており、押し波と引き波がぶつかったのではないかと思う。捜索などのために家屋を壊さなければならない場合があり、避難所に行って家の持ち主に了解をもらったが、家を壊すことに抵抗がある人もおり辛かった。遺体が見つかると連絡や確認をしたり車に載せられるところまで運んだりしたが、そのうちに自衛隊がやってくれるようになった。4月4日をもって金浜の捜索は打ち切ったが、自衛隊はその後も要請に応じて来てくれた。（聞き取り1、高浜）

地震津波の翌日12日から自衛隊がやってくる14日まで、高浜と金浜において、避難場所の人々のケアを統括し、溜まった水を抜き、道路を通れるようにガレキを取り除き、遺体を捜索したのは、主に佐々木氏を中心とした消防団員だった。とりわけ高浜の人々が避難した場所は当初、周辺から完全に孤立しており、消防団の活動がなかったとしたら、その状態はかなり長引いたはずである。自衛隊が到着した後も、自衛隊と地域を結ぶ橋渡し役として、なくてはならない活動を行っている。佐々木氏に請われて消防団の活動を手伝った松原氏は次のように語っている。

私は分団に入っているわけではないが、第十一分団長の佐々木好栄さんに、おれは金浜はわからないから頼むといわれ、私も若いころに分団に入れと言われ断った経緯もあり、役に立てるかわからないが、分団員と一緒に、ほとんど留守番だったが、活動に加わった。2週間から3週間くらい、毎日、自衛隊や金浜の分団員といっしょに活動した。自衛隊はありがたく、みんな感謝していた。捜索して遺体が見つかっても自衛隊員は誰だかわからないから分団員が呼ばれる。そのときのことを思い出すといまも辛い。自衛隊が撤退するときに分団の捜索隊も解散した。金庫を見つけて連絡すると、警察が取りにきて回収し、管理していた。水道は止まっていたが、井戸のある家があり、当初はそこから水をもらって運んだ。1トンタンクがあり、分団員がトラックを借りて、水を入れて運んだ。2日後位だっただろうか。給水車が来たのはもっと後だった。油も最初のころはなかった。2日後に国道45号が通ったため物は入ってきたが、ガソリンが足りなかった。2週間後位にボランティアとして宮古の労働組合、連合の人たちが来て瓦礫の撤去をしてくれた。当初は他にボランティアは見なかったが、しばらく経ってからは見た。（聞き取り3、高浜）

この語りをみると、警察が金庫を回収しに来たこと、分団員が井戸の水をタンクに入れて運んだこと、2日後には物が入ってくるようになったがガソリンは足りなかったこと、次第にボランティアが手伝うようになったことなどがわかる。麻痺した地域の秩序やインフラを回復するため、力や知恵を絞り、必死に活動していた様子が伝わってくる。

イ　避難生活

地震津波の当日、高浜集落の東北端にある高台、そしてコープケミカル社宅裏の高台に避難した人たちは、13日まで約2日間そこにいた後、主に金浜老人福祉センターの避難所に移動し、そこで避難生活を送ることになった。他方、金浜の人たちの多くも、避難場所・避難所だった高浜小学校の校庭が冠水したことから、急遽、避難所に指定された金浜老人福祉センターに移動し、そのままそこで避難生活を送ること

になった。ただし、三陸自動車道に避難した人たちの一部は、たまたまそこに居合わせた宅配便業者の車両で花輪へと移送され、花輪農村文化伝承館で避難生活を送ることになった。以下では、それぞれの避難所における生活について検討する。

■金浜老人福祉センター

高浜と金浜の避難所に指定されていたのは、高浜小学校であったが、先述のように、校庭に津波が流れこんだため、金浜老人福祉センターに変更された。そもそもが避難所ではなかったこともあり、多くの人でごったがえしていた。「3か月センターにいたが、最初の夜は大変だった。小学生も先生が責任を持って一晩預かりますということで全員避難していた。満員でトイレに行くにも人の頭を踏まないように、明かりがまぶしくないようにと気を使った。沢山ストーブを焚いていただいたので寒くはなかった」（体験談6、金浜）。

また、老人福祉センターに入りきれなかった人たちは、周辺の施設で過ごさざるをえなかった。「私は金浜に戻った当初、金浜老人福祉センターが一杯で入れず、隣にある宮古市身体障害者福祉センターの廊下で寝泊まりしていた。神社で寝泊まりしていた人たちは老人福祉センターに食事しにきていた。避難所になった金浜老人福祉センターには100人くらいおり、柳澤さんという方が中心となって切り盛りしていた。人が多くて狭く、みんなごっちゃだし、辛かった。私は他の分団員と一緒に舞台の上で寝泊まりした。食料は、最初は近隣にもらいに歩いていたが、高浜小学校の給食室を2回くらい借りて若いPTAのお母さんたちが炊き出しをして、避難所に持っていったこともあった。石油ストーブは3つ位あったが油がなく寒かった。私たちは屋外で分団員とドラム缶で火を焚いた」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。柳澤氏は、当時の老人福祉センター長であり、急遽、現場の切り盛りをすることになった。「避難所では、12日のお昼頃にご飯が出た。水は近所にきれいな沢水が出るところがあったので順番に汲んだ。古い家の水もあり、お陰で助かった」（体験談3、金浜）。時間が経つにつれ、次第に避難者が主体となって身の回りの世話や食事の支度などを行っていくようになったことがわかる。

老人福祉センターに避難したのは住民だけではなかった。「地震の翌日、宮古温泉マースの従業員とマースに流れ着いた女子高生が、老人福祉センターまで来た。マースの4階に仮眠用の毛布やシーツが置いてあり、センターへ運んで使った。寒いと言ったら、マースの支配人が、マースの4階に毛布があるから持ってきて使えと、食べ物もあるからと言ってくれて、消防団なんかが持ってきて使った。センターには150人位いたが、1人1枚位ずつあって助かった。センターの研修室にある舞台には誰も泊めてなかったから、マースの従業員はそこに2晩ほど泊まった。後日、花輪のマース関係の人が大きい車で迎えに来て従業員を乗せていった。毛布を全部もらったからとても助かった。老人福祉センターはふだん宿泊する人はいないから、毛布などは置いていなかった」（聞き取り4、金浜）。マースは津波により3階まで冠水したが、従業員やそこに流れ着いた女子高生は4階で一夜を過ごした後、自力でセンターまでやってきた。そしてマースから運ばれた毛布や食料が、センターの人々にとって被災当初の命綱になったことがわかる。

その後、次第に状況は落ち着いていき、自衛隊やボランティアがやってくるようになった。「老人福祉センターでは大人と子どもの居場所を分けていた。別の部屋は年寄りが集まっていた。最初のころ、インフルエンザにかかった人が隔離されたことがあった。鳥取からバスで22時間かけてきたボランティアのお医者さんが来たり、青森から来た人もいた。自衛隊にも感謝している。食事は毎日、ごはんと味噌汁と、肉がでた。最初は高浜小学校の給食室でつくって運んでいたが、自衛隊が運んできてくれるようになった」（聞き取り5、高浜）。ここにもあるように、避難所でなくなった高浜小学校はその後使われなかったわけではなく、食事をつくるのに給食室が使われるなど、むしろ積極的に活用され、また次の語りにあるように、教員らも支援にあたった。「学校は避難所にはならなかったが、自衛隊の中継所・駐車場となっていた。その方々や地域住民へのトイレ掃除等に忙しい毎日だったし、

自分自身も被災し、帰る場所も無くなり家族もばらばらになって大変だった。子供達にも地域に対しても、もっと何か行動をおこすことができたのかも知れないが、何もできなかった。電気・水道とも復旧まで1～2週間位かかり、学校の仕事はマヒ状態であったが、子供へのおたよりを作るとか何かはできたと思う。内陸へ帰った人達が1週間戻れなかったことも痛手であった」（高浜小学校、『東日本大震災の記録 調査報告書』）。

■花輪農村文化伝承館

地震後に三陸自動車道に避難した人たちの一部は、たまたま居合わせた宅配便車両の運転手により、花輪に運ばれた。「お墓を通って三陸縦貫道に向かうと、そこに運良く宅急便の車がいて、松山の中三機械まで乗せられた後、分団の車で花輪の伝承館に案内された。三陸縦貫道があったお陰ですぐに花輪方面に逃げる事ができたのは良かった」（体験談9、金浜）。自宅を流されるなどして途方に暮れていた人たちは、津波の心配のない内陸方面に向かうことができて、気持ちがいくらかでも楽になっただろう。「道路に運良くいた宅急便のトラックに乗せられ、本当にあの時は涙が出るくらいうれしかった。15、6人を乗せたトラックは、花輪の中三機械で降ろしてくれた。皆さんとても震えていたので、停電でも発電機でヒーターを点けてくれた。トイレも水が出るようにしてくれ、本当にありがたかった。2時間ぐらい世話になり、消防の自動車で伝承館に移動した。畳の部屋でストーブもあり、自治会や婦人会の方々が、暖かいうどんとおむすびを出してくれた。今までで一番のごちそうだと思った。野菜、お米、梅干しなどの差し入れや見ず知らずの私達にお風呂を貸してくれる方もあって、本当に感謝している」（体験談12、金浜）。これらの語りには、悲嘆に暮れ、寒さに凍えていた人たちが、暖かい施設のなかで温かい食事を口にできた、そのうれしさがよく表れている。

その後も、花輪の人たちにより心のこもった対応がなされ続けた。「地域の方が、発電機で灯りを点け、ストーブも3か所焚いてくれた。夜ご飯も出してくれ、野菜や米、手作りのみそ、梅干しなど、たくさん持ち寄って3日間炊き出ししてくれた。そのうち、当番を決めて自分達で自炊するようになったが、伝承館の管理人さんは、様子を見に毎日来てくれた。炊飯器も洗濯機も提供してくれた。水も地下水を運び、トイレにも使うことができた。本当にありがたかった。花輪の方々に本当にお世話になった。今年（注：平成24年か）の5月には伝承館で交流会をしてお礼をすることができた。本当に感謝している」（体験談11、金浜）。

やがて状況が落ち着いてくると、伝承館に避難していた人たちは仮設住宅や金浜老人福祉センターへ徐々に移っていった。「その後、徐々に仮設住宅への移動が始まり、最後まで残った7、8人のグループは、金浜老人福祉センターに移ることになった。花輪には80日間、金浜老人福祉センターには20日間ぐらいお世話になった。センターに移ると当番で川井から来ていたらしい職員の方は、精神的にも辛かった私達を気遣い、色々と話を聞いてくれて、本当に助けていただいた」（体験談12、金浜）。以上のように、伝承館に避難した人たちの語りには感謝の言葉がとても多い。避難している身ではあったものの、温かいもてなしにより、気持ちが楽になっていたことがうかがわれる。

しかしながら、先述のように、他方の金浜老人福祉センターでは大変な状況が続いていた。同じ金浜の避難者でありながら、その後の生活の質にかなりの落差が生じ、結果として人々のあいだに亀裂が生じることとなった。「金浜の人は金浜老人福祉センターと花輪農村文化伝承館と2か所に分かれて避難した。そこで同じ避難をした人でも違いが出てきてしまった。金浜老人福祉センターでは支援が届くまで、おにぎり1個とかパン1個とか、そんな生活をしていた。伝承館に行った人たちは、農村地帯だから津波も地震も関係なく、地元の人たちが炊き出しをしてくれた。花輪地区は婦人会がやってくれたが、老人福祉センターは自分たちでやらなければならなかった」（聞き取り4、金浜）。どこで避難生活を送ったかによって生活の質が大きく異なり、同じ地域の人々のあいだに溝ができることになってしまった。

ウ　自宅、その他の居所の生活

地震津波の後、幸い自宅に留まることができた人たちも、その後の生活は、やはり困難なものになった。建物はあったとしても、電気・水道はなく、道路が通れず食料や物資の入手も難しい。さらに、避難所にいれば情報は比較的入りやすいが、自宅にいると入手しづらい。

■自宅に留まる

自宅に留まる場合、当然だが、身の回りのことは基本的に自分たちで何とかしなければならない。しかしインフラや情報が断たれた状態において、それはかなり困難である。「（注：震災当日）しばらくして、夫が近所の方を避難させて来た。停電なので反射式ストーブを使い、食料は買物に行く前でほとんど何もないので、近所の方が持ってきたカンパンと小さいおにぎり2個、自宅にあった2リットルのペットボトル飲料1本を4人で分け合った。水には限りがあるので、薬を飲むにも苦労した。ろうそくを灯し、これまで一面識もない方達と一晩過ごした。何が起こるかわからないので寝るわけにはいかないなと思い、カギもかけなかった。怖いし、寒いしとても寝られなかった。翌朝は、家中からかき集めたバナナとりんごを分けあい食べた。／…（注：翌日）親戚も避難してきたのでお互いに服や下着を分けあい、米はあっても水が出ないので困ったが、この辺りには使える沢水や井戸があったので十分確保できた」（体験談1、高浜）。

次にみるのは、自宅はかろうじて残ったものの、津波で柱が失われ、余震が続くなかで屋内にいることができなかったケースである。「（注：震災当日）その後は田老に行っていた夫が戻って来ると思い、自宅近くで火を燃やして暖を取り待っていた。自宅は階段を支える柱がない状態で、今思えば危険だが暗くてわからないので2階から布団を持ち出して車の中で待っていた。やがて20時30分頃に夫が歩いて戻り安堵した。寒かったので火が一番ありがたかった」（体験談13、金浜）。

次も同一のケースであり、結局、自宅に居住できないため親戚の家に移動して生活を送ることにしている。「運が良かったのは車が残った事と冷蔵庫と冷凍庫が浮かんで、中に水が入っていなかったこと。水や食料を出して飲んだりした。…焚き火で暖を取り、冷凍してあった食料を出して何日間か過ごした。水は金ヶ沢から汲んで沸かして使った。自宅は住める状態ではないので、たまたまカギを預かっていた留守中の親戚宅を使わせていただいた。そこの家は流されなかったが、庭にあるがれきを乗り越えないとトイレに行けない状態だった。トイレにも海水は入っていた。運良く反射式ストーブがあり、被害の少ない部屋も使うことができたので助かった。そこには4月末ぐらいまで居たが、電気水道が3月末に復旧するまで、ろうそくを使い水汲みに通った。／避難所に居なかったので、物資はしばらく頂けなかった。ラジオも無く、情報が無いのも大変だった。最後の方に老人福祉センターで食料を頂いたが、冷凍庫の物は溶ける前に皆さんに分け、隣近所の方や友人も色々と持ち寄ってくださり助けてくれた。片付けが落ち着いた頃、久慈の息子の所に世話になり6月から仮設住宅に入居している」（体験談14、金浜）。

インフラの不備や飲食物の欠如をどのように乗り越えるか、知恵を絞って対処していたことがわかる。

■部屋を借りて家族を探す

次は、留守にしている時に自宅がほぼ全壊したが、翌日すぐに、宮古市の市街に部屋を借りて住み始めた例である。金浜に居住していた船越恭治・船越典子夫妻は、地震津波が発生したとき、それぞれ宮古市と山田町で勤務中であり、自宅に残していた母親ほか、家族と離れ離れになってしまった。

「3月12日、朝起きて勤務先に行き、貸家を紹介してもらった。金浜に戻り、自宅2階から炬燵などを取り出すことができた。荷物を借家に置いて、山田町に行き妻を探すが見つからず、山田町に在住している次男家族の住居に行くと、次男の嫁や孫たちがいた。3月13日、妻を捜すかたわら、長男、三男、四男と連絡をとろうと電話するが通じず、岩泉の三男夫婦の家に行くも、不在のためメモを残す。ガソリンがなくなり、3時間ならんでガソリン20リットルを購入した。

3月14日、近所の知り合いから、妻が帰ってきて金浜老人福祉センターにいると聞き、がれきのある場所を避けて八木沢、磯鶏、高浜を経由して向かった。センターで妻と再会した時は、感動して言葉も出なかった。湯ったり館で風呂に入って借家に戻った。

…3月26日、息子たちから「家に来て住まないか」という提案があったが、有難いが厄介になるだけだから、できたら自分たちの足で今までの生活をしながら一生を生きたいと思った」（船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」）。母親と自宅を失い、家族とも連絡がとれなくなってしまったが、地震津波の翌日すぐに部屋を借り、無事だった車で駆けまわって家族を探すなど、精力的に動いている。

エ　高浜小学校の再開

高浜小学校は校舎や体育館が避難所にならず、トイレや炊き出しのために家庭科教室が使われただけだったため、新学期の準備を行うことができた。当時校長だった大洞晴洋氏によれば、以下のような経緯であった。

3月25日に修了式と卒業式を実施し、新学期開始までの約4週間、学級担任による家庭訪問と地域や家庭状況の把握といった作業が行われた。その際、通学路の安全をいかに確保するか、心のケア、給食をどうするか、といった懸念事項があった。まず、通学路はがれきなど津波被害による危険があるため、1学期終了までの間、登下校を集団にし、毎日職員が交代で一緒について歩いた。避難所から仮設住宅に移ってからは遠距離通学も問題となったが、2学期から教育委員会の配慮によりタクシーで登下校した。

次に、児童に対する心のケアについては震災直後の家庭訪問から始めて個別対応を続けた。避難所や仮設住宅に入った児童は、より強いストレス症状を示すこともあり、長期にわたる支援が必要という。最後に給食については、新学期開始にあわせての実施が危ぶまれたが、なんとか実施できた。（大洞晴洋、平成24年）

オ　辛い思いと、ささやかなよろこびと

■辛い思い

震災についての人々の語りには、いたるところに言い表しようのない辛い思いが溢れている。なかでも他者の死に直面した経験は、後々まで大きな傷として残る。「2回目の波が堤防を越えたのでこの畑（注：避難していた高台の畑）まで来ると思い、皆で走り上がったが3人遅れて亡くなった。そのうちの1人だと思うが、『おーい、おーい、おーい』と3回呼ぶ声が聞こえた。波が線路まで来ると思い、逃げるのに手いっぱいで、後を見ることができず上の山に走り登った。そして宮古道路に出て、階段を登り線路に上がった。私は道路にある階段の場所を知っていたが、親戚は知らなかったと思う。道路の階段がもう少し下にあれば皆が助かったかも知れない。…逃げる時に聞こえた親戚の声が何か月も耳を離れなかった。食欲も無く、すっかり痩せてしまい、2か月経った頃にお茶などを持ち拝んできた」（体験談4、金浜）。

金浜の、江山寺や三陸道の周辺では、多くの人がわずかな差で助かったり、逃げ遅れたりしている。助かった人の背後にいた人が助からなかった、振り向いたらいなかった、ということが、あちこちで起きていた。そのような経験を忘れることはおそらくできず、ずっと抱えていかなければならないだろう。それでも、2か月後に、拝みに行くことができたということは、ひとつの区切りになる。少しずつ、そのようにして、歩いていくほかない。

自宅を失くすという経験がやはり深い傷を残すだろうことも、想像に難くない。「いま振り返ると、ふつうの生活に戻ったが、もういい、もうたくさんだという思いが強い。家が流されたのが大きく、当初は明日からどうなるのだろうという感じだった。分団長にちょっとつきあえと言われ花輪に行ったことがあったが、ポンプ車で三陸国道を越えていったらふつうの生活をしていて、その違いに驚いた」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。自宅が跡形もなく流されたという現実を受け入れようともがいているときに、その近くで、何事もなかったかのようにふつうの生活が営まれているのを目にしてしまう。そこにどうし

ようもなく存在してしまっている落差を受け入れるには、さらにどれくらいもがけばいいのか。

避難の際に何を持ち出すかについてのとっさの判断も、後悔の種となりうる。「印鑑も持ち出したが、後で再会した娘に『お父さんの位牌よりもお母さんには印鑑が大事なの』と言われて今でもそれがせつない。月日が経つと冗談に変わったがその時はとても胸が痛かった。戻れると思っての行動だったので、いくら親子でもドキッとした」（体験談12、金浜）。

あるいは、避難の途中で出会った人のことを、後々まで心配するということもある。「道路に立っていると、ずぶ濡れのスーツを来た男の人が半泣きで線路を歩いて来た。その方は、自動車で津波に遭い、車ごと線路の法面に上がったので、『今だ！』と車から降りたそうだ。言葉の感じから、この辺の方ではないようで、次の駅まで歩く途中だった。私達は、宮古の鉄橋が壊れていることも知らず、線路沿いに行けば大丈夫だろうとそのまま分かれてしまったので今も気がかりだ」（体験談12、金浜）。

地震津波の被害に追い打ちをかける、火事場泥棒の行為が横行したことも人々に辛い思いをさせた。「泥棒もひどかった。地震の次の日から、道路の上に物が散らばっていてみんな持っていかれた。現金はもちろんない。冷蔵庫も扉が閉まっていたのに中身がない。朝早くきて持っていったのではないか。バタンバタンと音がして、箪笥の引き出しが出されたりした。金浜の人なら顔がわかるが、知らない人がいるので、どこをお探しですかって聞くと、んーって行ってしまう。ある時、わーすごいこのゴミの山、と言われて、プッツンって切れて、失礼なこと言わないで、何言ってるの、みんな財産なのよ、どういう気持ちで言っているの、って言ってやった。私たちにしてみれば財産ですよ。それをゴミの山って言われて、ふざけるなと。今でも顔を覚えている。

まず昼間にきて目星をつけて、朝方またきて持っていく。金浜の住民でない人がいっぱい入ってきた。八木沢のほうから車で来て車を駐めてあるのを見つけて、警察を呼んだらその車自体が盗難車で、その人は捕まった」（聞き取り5、金浜）。

混乱に乗じておそらく相当数の泥棒が出没したが、被災者たちにはそれに対応するだけの余力が残っていなかった。結果として、自然の力によって破壊された生活が、人の悪意によってさらに破壊されることになった。

地震津波は人の命や自宅などの物のみを奪うわけではなく、人々は喪失によってのみ苦しむわけではない。避難生活は人々を消耗させ、親しい人たちとの関係をも蝕んでいく。「避難所などから食料を調達したが、あんな時は人を変える。皆、人を疑う。近所の盲目の方や体の不自由な方に配るために食事を運んでいたが、それを見た人に多く食料を持っていくと言われたりもした。親戚に物を運ぶために何度も山道を歩いて通っていたが、心ない噂に一時は怖い思いをした」（体験談2、高浜）。

地域の人たちのために必死に働いていた消防団員でさえ、その必死さゆえの、対人的なトラブルに見舞われる。「津波の後、郵便局のバイクが2台、金浜に置いてあったが、そのバイクを団員が勝手に使ったということで、宮古の消防署長、消防団長の2人が犯人探しにやってきた。道路が寸断されているがバイクであれば通ることができ、団員のなかに車屋がいたので直結してエンジンをかけて乗った。避難所に200人以上おり、足りないものがたくさんあったので、バイクで買いに行った。そのうちにバイクを盗んで遊んでいる奴がいると郵便局から消防署長へ電話があり、訴えると言われ、それで署長らが探しに来たのだった。バイクを使った団員が来て、午後に分団長といっしょに消防署に来いと言われた、と言うので一緒に行った。そこにいた人から、人のものを勝手に使ったら泥棒だろ、と言われた。頭に来て、なんだその言い方はと、喧嘩になった。いまだに忘れない。郵便局に謝りにいくが喧嘩になるから来なくていいと言われた。郵便物を入れる籠がなくなっていたからそれも合わせて弁償したんだ、あれがけっこう高かったんだと後で消防団長から聞いた。訴えて欲しかった、やってみろと。あの非常事態に。バイクを使ったのは高浜小学校で何十人

もの命を助けた団員なのに、そのことには一言も触れず、バイクのことだけ問い詰められた。いまだにそのことについて謝ってきていない。自分たちのことしか考えていないようにみえる」（聞き取り1、高浜）。非常事態を打開すべく必死に活動するなかで誤解が生じ、それが大きな諍いにまで発展し、時間が経過してもそのしこりが残り続ける。

以上のように、震災は目に見える被害だけでなく、目に見えない、それゆえに他者に認知されづらい被害をもたらす。そうした被害は人の心にわだかまり続け、少しずつ少しずつ薄まっていくのを待つほかない。

■ささやかなよろこび

震災についての辛い語りの合間に、ホッとさせられる、ささやかなよろこびが漏れることもある。辛いときだからこそ、とりわけ人の心の温かみは格別なものとして経験される。「家は8か所ぐらいに分散していた。屋根の上を歩くと足が滑り、自衛隊の方がパッと来て後と前についてくれた。素手で雪に手を着いたら手袋までくれて、ありがたかった。縦になっていた自動車の上に見覚えのある宝石箱が載っていた。何とかよじ登り、下に落とすと水で木が膨張して開かなかったが、こじ開けると中から自分の物が出て来た。もう、うれしくて。高価な物ではないが、今見ても自分の物があっただけで可愛い。…自衛隊から頂いた手袋も今でも大事に持っている。家族は、皆元気なので良かったと思うことにしている。…今回のことで、人の好意のありがたさを感じた」（体験談12、金浜）。

途方に暮れて歩いているときに、自分を気遣い、手を差し伸べてくれる人がいるのだと気づくことは、その人に大きな勇気を与える。被災後の自衛隊の活動に対して多くの人が感謝の言葉を述べるが、それは自衛隊の隊員が、救援や捜索の作業を、心をこめて行っていた証である。それをプロ意識の強さゆえであるとみなすか、単なる仕事の域を越えた人間のまごころの発露であるとみなすかは、あまり重要ではない。多くの被災者が彼らから、実際に勇気づけられ、生きていく希望を受け取ったことが重要である。

同様に謝意が表されることの多いのが、ボランティアである。先述した、花輪の農村文化伝承館における、花輪の人々による献身的な支援に対しては、多くの被災者が繰り返しそのありがたみについて述べている。その他、被害を聞きつけて支援のための物資を送った人たちとの交流や、他所から駆けつけたボランティアとのあいだに結ばれた心のきずなも、被災者たちに希望を与えた。「青森からジュースが届き、『1人じゃない、私たちもいます』というメッセージが入っていてうれしかった。嬉野市からお茶をもらったので、お礼のはがきを出した。初めて急須でお茶飲んでうれしかったと書いたら、市長からまたお茶が届いた。被災した年にバスから見たひまわり畑がみえていいなあと言ったら、ボランティアさんが次の年に奈良から種を取り寄せてひまわりを植えてくれた。その種は名古屋の緑化組合をとおして、全国にいって咲いている。あれはうれしかった。やってくれたのは沖縄から来た子だった。ひまわりの種を植えて、草取りから土をならすのからゴミをとるのからぜんぶやってくれた。意気投合して、私のところにご飯を食べに来たり、今でもお電話もらったりしている。その子がいろんな人を引きつけて、他にもいろんなボランティアの方が来てくれた」（聞き取り5、高浜）。

避難所や仮設住宅でストレスの多い不安な日々を過ごす人々にとり、「ボランティアさん」とは、単なる物理的な労力であるのではなく、あたたかみと希望をもたらす存在であった。震災から数年経った後も交流が続いているというのは、被災者たちが「ボランティアさん」に、文字通り未来への希望を託していることを示している。

(5) 未来に向けて

ア 地震津波への備え

■避難訓練

東日本大震災は高浜・金浜、そして他のたくさんの地域で多くの人々の命を奪い、歴史や人々の記憶の詰まったさまざまな物を流し去っ

た。東北地方の沿岸に暮らす人々はこれまでにも繰り返し津波の被害に遭ってきている。津波への備えはされてきたはずだが、今回の津波は、記録に残るどの津波よりも際立って大きく、それゆえ被害が大きくなった。しかしながら、だからといって、被害のすべてが、自然の猛威によるやむをえない結果だったかといえば、決してそうではない。これまでみてきた様々な事例をみれば、もう少し早く行動を起こしていれば、あるいはもう少し心構えをしておけば、と思われるものがいくつもあることに気づく。以下では、震災前の、ふだんからの心構えや、地域で行っていた避難訓練について、考えてみたい。

高浜・金浜では毎年3月3日（昭和三陸津波の日）に避難訓練を行っており、震災直前の平成23（２０１１）年3月3日にも行っていた。とりわけ高浜では、地域住民の防災意識が高く、避難訓練への参加率も高かったという。「高浜では、3月初めに避難訓練をやっている。震災前にも3日か4日にちょうどやったところだった。自治会で、会長が変わってもずっとやってきた避難訓練は、やはりとても大事だった。震災のとき、内陸にいる息子も娘も、お母さんは大丈夫だと思ったらしい。そして実際に大丈夫だった。ここの自治会はとてもいいことをやっていると思った。とりあえず近くの高台に集まるので、1か所あたり5、6人が集まる。それが活きたと思う。迷わずに、みんな参加していた。高浜の被害が少なかったのは訓練のおかげではないか。寝たきりの人でさえ運んでもらって高台に避難できた」（聞き取り5、高浜）。

このように、高浜では防災意識が高く、避難訓練の参加率も高かったのは、昭和35（１９６０）年のチリ地震津波の際に大きな被害を受けてからのことであった。「普段から家族で、時々津波の話をしている方がいいと思う。妻はチリ地震で津波に遭い、寝巻だけで山に上がったら家が波に飲まれた」（体験談2、高浜）。高浜で防災意識が高いことは、チリ地震津波から約30年後の平成3（１９９１）年、高浜自治会が中心となって回想文集『チリ地震津波より三十年 あの惨状を振り返って』が制作されていることからもわかる。今回の震災で比較的死傷者が少なく、避難場所の混乱も少なくて済んだのは、普段からの備えがあったことも一因であると考えられる。

しかし、全く問題がないわけではない。「高浜自治会は平成9年、市内でも早い段階で自主防災組織を立ち上げた。しかし高齢化が進むなど実質的には活動に参加する人は少なく、十分に機能できる体制ではなかった。高浜地区の住宅地には高台に避難場所はあるが、避難所がない。さらに、がれきや浸水により避難場所に行きたくても行けない状況だった。救援物資が届くまでの間、数日は自分たちの地区は自分たちで守らなければならないことが浮き彫りになった。そのためにも避難訓練、そして何より地域の結びつきを大切にしたい」（体験談15、高浜）。

高齢化が進んだことにより、避難訓練などに参加する人は減ってきており、必ずしも十分に機能できる状態ではなかったという。また、避難場所にたどり着けない、避難所が遠い、などの問題もなかったわけではないことがわかる。

金浜でも震災前、避難訓練は行われていたが、高浜に比べると参加率は低かったようである。「避難訓練は、年に1回くらいしていたが、参加者は1人とか2人とか、少なかった。お寺で亡くなったおばさんは毎回参加していたのだが。震災前に防災意識が薄かったのは確かだ。（金浜の人は）堤防があるから大丈夫だという意識をもっていたのではないか。チリ地震の後、防潮堤ができてから、国道沿いに家を建てたり、高台から下りてきた人がたくさんいた。そのまま元の場所にいればいいのにと言うが、山の上はやはり不便だ。それで下の方に下りてきたのではないか。多くがチリ地震の後で一旦上へ上がったが、徐々に下に戻ってきた。金浜で震災後も残っているのは、よそから来た人の家が多い。昔からある１００軒位のうち8割～9割は津波にやられたのではないか。」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。

チリ地震津波の際、金浜は高浜よりも被害が少なくて済んでおり、それゆえか、住民の防災意識は相対的に低かったとみられる。むろんそれでも、なかには意識の高い人もいた。「3月3日の避難訓練には毎年参加していた。大きな避難リュックには、袋を3つ、はおれるもの、

懐中電灯、サンダルを入れていた」（体験談12、金浜）。このように万全の準備をしていた人であっても、金浜の場合は押し寄せた津波の規模が大きく、危うく逃げ遅れかけている。先の「聞き取り3」でも、毎回避難訓練に参加していたにも関わらず逃げ遅れてしまった例があることがわかる。全体に防災意識が低めであったことに加え、津波の規模がとりわけ大きかったために、被害が拡大したといえるだろう。

■人々の防災意識と備え

住民それぞれの具体的な防災意識はどのようなものであっただろうか。「私は漁協で18歳のときから働いていて、異動になってまた戻ってきたが、当時の上司が、おい津波のときは逃げろよと、命あってのことだからなと言っていて、ずっとそれが頭にあったから、今回地震があったときに仕事やめて逃げろってみんなに言った」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。このような意識があったからだろう、この方は地震の直後、迷わず部下を連れて避難している。日頃からのこのような意識が、とっさのときの素早い行動につながるとすれば、意識を喚起するために、繰り返し周囲の人たちと確かめあうことが何より有効であろう。

どこへ避難するかも、日頃から考えておく必要がある。高浜では、住民はとりあえず近くの高台に避難し、その後いくつかの避難場所に移動するという手順が示されていた。しかし金浜では避難の手順が必ずしも周知されておらず、混乱が大きくなった。「どこへ避難するかというのは自分で決めておくしかない。備蓄するものなどがあるから避難場所は必要だが、遠い避難場所に避難しても、途中で流される可能性がある。チリ地震のとき小学生だったが、近くの高いところに避難して他の人も避難していた。最初から避難所に避難するというのはこのような地形では難しいのではないか。裏は山だからとりあえず高いところへ」（聞き取り4、金浜）。

金浜では、特に南部に居住する人たちにとり、避難場所が遠いという問題があり、実際のところ、南部の人の多くが避難したのは、江山寺付近や三陸道であった。現実的な避難先を想定し、日頃からそこへ避難するのだという意識を持つことが、いざというときのために必要であろう。

いざというときに備え、日頃から避難用のリュックを用意しておいたり、所持品に名前を書いておくといったことをしていた人もいた。「救急リュックを取りに2階に上がろうとしたが、揺れでなかなか上がれなかった」（体験談11、金浜）。すぐに取り出して避難できるよう、救急リュックはすぐ手の届く、家の出口に近い場所に置くべきだろう。「私は、昔津波にあった方から物に名前を書いておけば良いと聞いていたので、鍋釜や指輪など家の物ほとんどに名前を書いていた。それで見つけた方が持って来てくれた」（体験談4、金浜）。流されても名前が書いてあれば戻ってくることがあるという、津波に洗われ続けた地域ならではの知恵である。

■裏道や水場を知っておく

避難場所や避難所がどこであるか知っていたが、地震津波の後にたどり着けなかったという例がいくつもある。高浜や金浜の集落の背後は山であり、山道を通っていけばたいていの場所にはたどり着けるはずであるが、それを知っている人はわずかである。「私は定年後に退屈なので、裏山を歩いて道を覚えていた。避難所を決めても、そこに行く道を教えておかなければならない。高浜から山を越えて八木沢の短期大学に抜ける道がある」（体験談2、高浜）。

このように、街が浸水した場合を想定し、山を通って避難場所へ行く道を覚え、実際に歩いておくと、いざというときに大いに役立つ。山道の知識が役立つ例は他にもある。「とにかく帰ろうと八木沢街道を歩いていたら、自宅に辿りつけずに職場に戻ろうとしていた近所の息子さんに出会った。私は裏道を知っていたので一緒に連れて歩いた」（体験談14、金浜）。

また、「裏道や水場の存在を知っているのも大事だと思う」（体験談13、金浜）、とあるように、水場を知っておくことも大いに役立つ。「米

はあっても水が出ないので困ったが、この辺りには使える沢水や井戸があったので十分確保できた」（体験談1、高浜）。「水は近所にきれいな沢水が出るところがあったので順番に汲んだ。古い家の水もあり、お陰で助かった」（体験談3、金浜）。「水は金ヶ沢から汲んで沸かして使った」（体験談14、金浜）。このように、高浜や金浜にはいくつもの水場があり、それがいざというときには命綱となりうる。

「水道は止まっていたが、井戸のある家があり、当初はそこから水をもらって運んだ。1トンタンクがあり、分団員がトラックを借りて、水を入れて運んだ。2日後位だっただろうか、給水車が来たのはもっと後だった」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。避難所でも、給水車が来るまでの2日間、地元の水を使えたことは大きかった。

以上のように、ふだんから備えていたことが震災の際に大いに役立ったという例は多いが、しかし起こっていない地震津波に備えることは一般に難しいだろう。いかにリアリティをもっていざというときに備えられるかが鍵であるといえる。

イ　これからの高浜・金浜

■描きづらい未来像

２０１４年8月の時点で、高浜・金浜の住民のうち自宅を失った人の多くは、高浜東北端の高台につくられた高浜仮設住宅か、磯鶏地区にある河南仮設住宅に入居していた。集落は高台への集団移転が決まっており、高浜小学校の裏の高台、金浜から八木沢に抜ける高台に、それぞれ宅地が造成されつつあった。金浜で自宅を流された松原薫氏は、自分の家族、そして金浜の現状と将来について、以下のように語った。

造成が終わるのは来年の秋ということだから、家を建てるのはまだまだ先になる。松原家もいまは父と妻と3人で磯鶏の河南仮設住宅にいるが、高台に家を建てることを希望している。金浜の人は50世帯くらい河南の仮設住宅にいるが、そこには磯鶏と藤原の住民もおり、ぜんぶで16棟、およそ１００世帯あり、ほとんどの人は元の地区に戻るつもりでいる。私と妻だけならどこでもいいのだが、親父が金浜に戻りたいと言う。だが来年までは長い。

震災後は仮設住宅に入ったり市内に散らばったりしているから、集まる機会がない。私がいる仮設住宅でもコミュニケーションをとるために、焼肉やビアガーデンをやるが、参加するのはほとんどが金浜の人で、（同じ仮設住宅にいる）磯鶏や藤原の人は来ない。津波の後は神社の祭りもやっていない。みんな戻ったら再開するのかもしれないが。金浜では10月10日あたりに神社の祭りをやっていた。しかしいま何月何日にお祭りだと言っても誰も行かないのではないか。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

住み慣れた自宅も、近隣の家々もすべて流されてしまい、後には更地しか残っていない。それでも、金浜の住民は同じ仮設住宅に集まって暮らし、イベントを開くなどしてコミュニケーションを図り、いずれは金浜に戻りたいと考えている。大筋では、元に近い場所で元に近い生活を送る方向で未来を描いているが、そこかしこに、疲労、迷い、不安が顔をのぞかせている。「小学校の裏の高台は高浜地区だが、金浜の住民でそちらに入る人もおり、金浜地区としての一体性が失われるかもしれない」（聞き取り4、金浜）、という声もある。元の生活に戻ることが、物理的にも、精神的にも不可能であるなかで、それでもできるだけそこに近づきたいという思いが、辛うじて未来を開いていく。

写真３　金浜の高台に造成中の宅地
2014/08/13　撮影：宮坂 清

高浜にあって全壊してしまった勤務先の漁協施設は、新しく建てなおされ、仕事を再開したものの、心機一転やり直すという意気込みよりは、こちらもやはり将来への不安が際立つ。

ここ（宮古漁協高浜水産研究センター）は鉄骨だったから津波でぜんぶ中が抜けてしまい全壊したが、昨年9月に新しい建物が完成し、今年から本格的に仕事を再開した。この施設はワカメ、コンブ、ホヤを採魚してそれを組合に提供する。ワカメがいま入って2週間。ワカメが終わればコンブ、12月。その後はホヤの採魚。ここが再開できるまでは漁協のビルで、補助事業の共同事業をやっており、２７０槽くらい。ワカメの養殖施設は復帰したが、今度は年をとり金もかかるからやめるという人がでてきた。震災の前と後では活気がぜんぜん違い、養殖している組合も減った。後継者がおらず、いま60代で頑張っている人がやめればどうなるかわからない。若い人は津波の被害はなくても外へ出てしまう人が多く、東京など県外に出ている人が多いのではないか。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

施設が復旧しても、そこで働く人の活気は戻っていない。ただでさえ進行していた高齢化と後継者不足が、数年の断絶を経て、一層深刻になってしまっていることがわかる。生活の場においても、職場においても、地域の未来がどのようなものなのか、明確に描くことが難しい状況にある。

■防潮堤の嵩上げは必要なのか

２０１４年8月現在、高浜や金浜では既設の防潮堤に嵩上げする工事が始まりつつあった。地域の人々のなかには、津波の被害を食い止めるために防潮堤の嵩上げは必要と考える立場と、必要ないと考える立場がある。まず、必要とする立場である。

堤防の嵩上げについての市役所の説明は、津波が来ないようにするのではなくて、被害を少なくするためのものであるとのことだった。20㍍の防潮堤をつくるわけにいかないし、越えるという前提だという。同じ規模でまた津波がくれば、うちはまた浸水する。浸水しても被害を少なくするためには嵩上げするしかない。（聞き取り4、金浜）

積極的にというわけではないが、少しでも被害を減らすため、このように嵩上げが必要と考えるか、次の2人のように、嵩上げすることの弊害を強調し、必要ないと考えるか、判断は分かれている。

防潮堤を高くすると言っているが、海が見えなくなったらますます逃げる人が減るのではないか。それより避難道を整備したほうがいいのではないかと思うが、そういう方向には動いていない。そもそも（湾の）奥のほうで津波が高くなるわけだから、堤防を高くして水門で止めるより、津軽石川沿いに上流に向かって堤防をつくり、津波を逃がすほうがいいのではないか。津軽石川の水門を造ると決まったのは私が小学校か中学校のときだったが、あそこで止めるとはね返って波がみんな金浜にくるからと、金浜の人たちはみんな反対した。ますますひどくなったとみんな言っていた。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

津波のときには防潮堤があって波がみえなかった。震災後、防潮堤を2㍍嵩上げして10・4㍍にするといっているが、さらに海と陸をバラバラにしてしまう。あれはおかしいのではないか、他にやることがあるのではないかと思う。防潮堤を高くすれば水の行き場が狭くなるだけで、結局どこか弱い所へ集中することになるのではないか。人工的なもので守ろうとするのは無理ではないか。津波の教訓としては、逃げるのが第一。それなのになぜ防潮堤を2㍍も高くしなければならないのか。普段の生活も大変になるし、景観も悪くなるし、作ったからといって逃げなくていいわけではない。あることによって逃げなくなるのなら、むしろ作らないほうがいいのではないか。生活している人間がいることを忘れている。なぜ普段の生活を犠牲にしなければならないのか。コンクリートの寿命は50年、長く見積もっても１００年であり、１０００年に一度の津波だったら10回作りなおさないといけない。自然を壊すことにもなる。水産と観光の街だと言いながら、来てみたらコンクリートの塊しか見えないということになる。しかしこの地域でも賛成の人もおり、安全のためだと言われると次の言葉が出

せない。それですべてが許されるという雰囲気があって言いづらい。だが子どもたちの未来を考えると、自然を減らしてしまえば海の浄化作用もなくなり、生態系に大きな影響がでる。防潮堤については、今あるものは残していいが、嵩上げはしなくていいと思う。（聞き取り1、高浜）

ウ　果たして、防災とはなにか

今回の地震で押し寄せたような巨大な津波を完全に防ぎきるための手立てを、おそらく私たちは持ちあわせていない。だとすれば少しでも被害を少なくする方法を考えなくてはならないが、堤防の嵩上げをすべきなのか、それとも避難道を整備し、人々を啓発することで対応すべきなのか、結論が出ないまま嵩上げの工事は始まってしまった。

人々のあいだでは、目の前の生活や将来に対する不安が先立っており、防災についての話し合いはほとんどなされていないという。津波が流れこむことが予想される場所に、住むのをやめて高台に移転し、防潮堤の嵩上げをすれば、もしかしたら人々は避難訓練すら必要と感じなくなるのかもしれない。もしそうなったとしたら、本稿にその一端を収録したような、膨大な量の、辛く苦しい経験の記憶は、行き場を失ってしまう。

写真４　金浜で開かれた「夢灯かり」
2014/08/16　撮影：宮坂 清

しかし実際はそうでなく、具体的にどのような津波対策がとられるにせよ、将来いずれ必ず津波はやってくる。震災経験の記憶をこのように残していくことは、将来の津波に対する、本源的な対策として機能するはずである。

【注】

『平成24年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』に含まれる語り。煩雑さを避けるため、「体験談1」～「体験談14」まで番号を振り、続く本文中にはその番号で示す。なお、年齢は、平成24年当時のものと思われる。

体験談1：「印象は波がぴちゃっと来るぐらい」（高浜 70代 女性）、34～35頁。

体験談2：「裏山を歩いて道を覚えていた」（高浜 80代 男性）、36頁。

体験談3：「長い揺れで津波が来る予感」（金浜 70代 女性）、37頁。

体験談4：「物に名前を書いていた」（金浜 70代 女性）、38頁。

体験談5：「津波のことは全く頭に無い」（金浜 70代 女性）、39頁。

体験談6：「避難しないと決めた」（金浜 70代 女性）、40～41頁。

体験談7：「津波を見た事がないから見よう」（金浜 60代 女性）、42～43頁。

体験談8：「孫らに助けられた」（金浜 70代 女性）43頁。

体験談9：「津波が引いた後に黄土色のもや」（金浜 60代 女性）、44～45頁。

体験談10：「入り口が1ヶ所だった」（金浜 80代 女性）、46～47頁。

体験談11：「中国で日本の東北に3mの大津波」（金浜 70代 女性）、48～49頁。

体験談12：「泥の中から見つけた自分の物」（金浜 70代 女性）、50～52頁。

体験談13：「絶対堤防を越えないと思った」（金浜 50代 女性）、53～54頁。

体験談14：「冷蔵庫は浮かんで水が入らなかった」（金浜 60代 男性）、54～56頁。

『広報みやこ』NO．151に掲載されたインタビュー。

体験談15：城内義男さん（高浜 男性）

体験談16：山本正輝さん（金浜 男性）

船越恭治『東日本大震災発生からの20日間（生命を求めて）』に含まれる、船越恭治氏と船越典子氏の回想文。
船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」、1～13頁。
船越典子「二、家族の証言　（一）船越典子」、14～17頁。

【参考（引用）文献】

大洞晴洋「あの日からの揺るぎない前進」、国立教育政策研究所監修『震災からの教育復興―岩手県宮古市の記録』2012年10月、悠光堂。
宮古市教育委員会『宮古市史 民俗編 上巻』1994年、宮古市。
宮古市教育委員会・宮古市教育研究所『東日本大震災の記録―調査報告書』（平成23年度研究紀要第79号別冊）2012年3月。
宮古市東日本大震災記録編集委員会『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻（津波史編）』2014年3月20日、宮古市。
宮古中央公民館『2012年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』2013年3月。
船越恭治『東日本大震災発生からの20日間（生命を求めて）』2015年10月1日。

【資料】

■聞き取り

下記の5回、地域の方々からお話をうかがった。「聞き取り1」から「聞き取り5」まで番号を振り、本文中にはその番号で示した。

聞き取り1：平成26年8月12日、佐々木好栄さん（1954年生）、宮古市消防団第十一分団屯所にて
聞き取り2：平成26年8月12日、安倍主税さん（1955年生）、「異人館」にて
聞き取り3：平成26年8月13日、松原薫さん（1963年生）、宮古漁協高浜水産研究センターにて
聞き取り4：平成26年8月13日、荒川清孝さん（1951年生）・佐々木春雄さん（1944年生）、河南仮設住宅集会所にて
聞き取り5：平成26年8月17日、岩間弘子さん（1957年生）・岩間リサ子さん（1936年生）・工藤ヒデ子さん（1938年生）・関川のり子さん（1940年生）・細越章子さん（1957年生）、高浜仮設住宅集会所にて

■資料・記事

「宮古市東日本大震災津波浸水図」2012年9月、宮古市。
「避難所調査書　H23・3・23」（「東日本大震災避難所等提供資料」）
「金浜老人福祉センター 避難所利用実績（平成23年3月）」
「金浜地区の復興はこれから」『Better Core 2013 秋』2013年10月、芳林社。
「3・11教訓1 二つの機転が命救う 高浜小［宮古市］」岩手日報、2012年1月9日。
「広報みやこ」NO．151、2011年12月1日。
「避難所への情報提供 1～28」宮古市（http://www.city.miyako.iwate.jp/kikaku/hinanjo_joho.html）

インタビュー　安倍主税さん（全文、ただし一部改変）
実施日：２０１４年８月12日　場所：高浜「異人館」（喫茶店）

■閉伊川の防潮堤の上から津波をみる

地震があったときは宮古の街にいて、すぐに閉伊川の水門に行ったんです。行った時は水門はすでに他の団員が閉めていたんですがね。まだその時は大きな津波が来るっていう感じじゃなかったですよ。最初は３メートルっていう話でしたもん。２日前も地震があってその時は50センチで、結局それが前震だったんです、いま思えば。それでちょうど15時に第１波が到来したんです。川は普段と変わらないんですが、白い波が閉伊川の上流の方へサーッと流れていったんです。まだあまり津波だって意識はないんですよ。あまり見た人はいないんではないでしょうか。20センチくらいでしたがね。私（副分団長）と分団長が防潮堤からみていて無線で報告しました。それから閉伊川の水が引いていって、川底がみえました。でも川だからそれほど深くはなくてすぐ底が見えるんです。中学校のときに経験した十勝沖地震くらいの感じで、来るな、という感じがしました。

■ここまで来ると思わなかった津波に、突然襲われる

それから黒い波が来たんです。閉伊川につないであった船や、埠頭に駐めてあった車が流れてきて鉄橋の橋桁にぶつかって、木造の船は砕け、鉄の船はドーンという感じで上流へ流れていくわけですよ。それをずっと見ていたんですがね。どんどんどんどん波がくるんですがね、だんだん私たちもこれはちょっと違うなと思い始めたんです。なんとなくこう川下の方、市役所や宮古大橋があるほうを見たんですよ、カメラを回しながら、その時にあのよく知られた宮古市役所の前の防潮堤からザーっと流れ込む写真の、あの波が来たんですがね。市役所の辺りは防潮堤がまっすぐなんですが、私たちがいた山田線の鉄橋のあたりはカーブしていて、波がグワーンと盛り上がったんです。港のところにつないであった白い観光船が、防潮堤のところで空にブワーんと飛び上がるような感じで見えたんですよ。そこまでは見たんです。あー来た、危ねえ、逃げろ、という感じで。そんなもんですよ。分団長を先に防潮堤から下ろし、私もカメラをバッグにしまって、ファスナー閉めて降りて、途中で飛び降りたんです。

■水をかぶり、流される

そしたら水が頭からザーっと降ってきて、かぶってしまったんです。それで近くの民家の玄関の高いところにいたんですが、水がどんどん来る。どんどん水量が上がってきて、民家の窓が割れて水がザーッといく。そこは地下室があるといわれている家だったんですよ。なのでそこへ入って行っては危ないなあと思って、こっちの方へいくしかないなあと思っていたところへ発泡スチロールの箱が流れてきたので、それにつかまって流れていったんですよ。泳げるような状態ではないんですよ。ただただ流れていくんです。それでその箱が壊れてきたんですが、運良く漁師さんが漁船に載せている浮き輪が、こうたまたま流れてきたんです。そういうことがあるんですよ。あーっと思って腕を通して、つかまって安心したんですよ。分団長をはじめ私たちの仲間が線路のところにいたんですがね。ああ大丈夫だあっていう感じで、あとは流されていったんですよ、３００メートルくらい。沈むことはないから、そのうちどこかへたどり着いて助かるなあと思ったんですよ、その時は。だけど次は、その辺りは駐車場が多いために水がドーッと流れていって、家があるところに来たわけですよ、そうすると流れてきたがれきが家に押しつけられてみんな溜まっているわけですよ、家が動くまでじゃなかったから。

■死ぬのかなあと思う

そうすると、ビーバーの巣のような状態になってるところに私が流れていくんです。水は下を流れていくし、上はがれきが浮かんでるし、体は下へサーッと入っていくんです。それで上が塞がって息ができなくなってしまったんです。手で開けようと思うんですけど、なかなか

開かない、やっぱりいろんなものがグチャグチャになっているから。そこでもがいて、3回か4回くらいは水を飲みましたよ。それでも苦しくはなかったですよ、不思議と。プールとか海で溺れてような感じではなかったです。困ったことになったなあ、うーんそんな感じ。でももしかしてここで死ぬことになるなあと思ったですよ。で、最後に顔が出た。その時に見ていた消防団員の仲間は、後から聞いた話なんですが、がれきの中に入っていく私をみて、ああ入っていったと、そのまま出てこなかったわけですよ手も顔も。もがいているし、けっこう時間も経ったと思います、ああもうだめだってあきらめたらしいですよ。後から聞いた話ですよ。それで、顔が出て手が出たでしょ。ああ生きてたーっていうわけです。

■なんとか這い上がるも、今度は凍死しそうになる

それからがれきの上に這い上がって、小屋の屋根のところに横になったんです、安全なところで。後はヘリコプターかなにか来るんですけども、でも様子を見にきただけだから、ただパラパラって山田の方へこう行くわけです。で、寒いわけです。雪も降ってくるし、暗くなってくるし。ガタガタって震えて、でも立ってる体力はないんです。「立ってみろ」と言われるんですが、立ってはみるんだけどヘナヘナっとなってしまうような状態。このまま凍死みたいなことになるのかなっていう感じですがね。助けてくれって言っても、助けに来れないんですもん。ずっとその黒い水が溜まっていて、線路の方はずっと100㍍位はありますかね。水に入っていたのは20~30分位でしょうかね。水に浸かっている時は寒くないんですよ、命がかかってるから、冷たいも何も関係ないんです。上がってから、濡れているために冷えてくるんですもん。水のなかはおそらくそれほどではないんです。

■運良く救助され、姉夫婦の家で一晩過ごす

で、たまたまなんですよね、お巡りさんがいて、その人が無線で連絡してくれて、それでアルミのボートが来たんです。携帯電話も通じる状態ではなかったじゃないですか。その人がいなかったら私は助からなかったかもしれません。それでがんばれーって言ってる私の仲間も、今度は鉄橋が流されていったんですよ、その時にはドーンとかバリバリとかいう音がするわけです。下手をしてこちらへ来たら逃げねばならねえという感じですよ。私には悪いけど置いて逃げるしかねえという感じですよ。そんな状態でしたがね。それで5時半頃に消防署のボートが来て助けられたんです。助けられたのはいいんだけど、それで病院に行ったのって後でみんなに言われたんですよ、でも毛布もなかったんですよ。同僚が持ってきた毛布をかぶって、軽トラに乗って、山口小学校が避難所だっていうんでそちらに行ったんですよ。その時はもう暗くなっていて、みんな懐中電灯とかを持って歩いて小学校の体育館に行ってる姿は見るんですっけ。で、体育館も暗いじゃないですか。それで、濡れた状態でここに行ってもだめだなあと思ったんです。それで、近くに姉夫婦の家があったんでそこに行ったんですよ。で、お風呂ってわけにもいかないから、水をかぶってヘドロを落として体を洗って、後はその晩はその家でウイスキーを飲んだですよ。それで落ち着いたんです。

■「異人館」へ寄り、捜索活動に加わる

次の日はここ（注：異人館）を見に来ましたがね。その時は宮古の街を歩いてきて、大船渡のほうで5㍍の津波が来たっていう放送があったんですよ。それで自衛隊の人から、こう逃げろおって言われて、私たちも分庁舎の上のほうに上がって様子みたんだけど、結局デマだったんです。そういうのはけっこうあったんです、また来たって話が。困ったなあ、ここへ来るにはどこを通って来たらいいんだろうか、磯鶏を通ったほうがいいのか小山田を通ったほうがいいのかなとかって考えて、人に聞いて、あっちは歩けますっけって聞いたら歩けるっていうから、こうこう歩いてここまで来ました。ここに来たらば、建物は残っているが、下がもう何もない状態で、うん、それで1回帰りましたがね。

次にその後、金浜高浜の十一分団のところで行方不明者の捜索活動

をしました。話はみんな聞こえていたんですっけ。二分団の副分団長が流されたっていう話をね。無線とかなにかで話は流れていたんですっけね。それでもう次の日には袢天着て歩いてるじゃないですか。だからみんなから、あれっていう感じで。いや、結局、夢中だったんでしょうね、と思いますよ。だってみなさんヘドロの水とか飲めばみんな肺炎になったりしたんですもんね。水出して病院行ってっていう感じで、盛岡の病院なんかに行ったんですもん。で、何もなかったのって言われて、いや別に大丈夫だったって、水も出ないしなにもって。どっか怪我はって、すり傷くらいですもん。だから後はずっと金浜のほうでお手伝いしました。

■頭が混乱してくる

ちょうどそのとき、2日前に父親が宮古市内の病院に入院していたんです。母親もそれに付き添いしていたんです。その病院は非常発電の電気もあったんですよ、だからあそこは大丈夫だって、私も安心したんですがね。で、私が流されたとかってのは言わなかったですよ、親にはね。でもやっぱりわかるんですよ、看護婦さんたちもいつもの私の顔とちょっと違うなってのが。やっぱり少し魂が抜けたような感じだったとは思います。捜索活動をして、今度戻ってまた知人のところへ泊まっていたんですけど、その繰り返しでしょ、やっぱりこう精神的に変になるっつうかね。あのがれきだらけのところで遺体を収容したり何だりして、今度は何も変わりのない当たり前のところを通っていくじゃないですか、その繰り返しに、何だか頭がこう混乱してくるような感じの。うん、そうですっけよ。

■辛い遺体収容

だって遺体収容っていうか、まあ最初は余計に滅茶な捜索だったんだけれど、結局、生きて見つかった人はいなかったですけどね。でもこう、この地区で何人何人って、あとは結局、車で通りかかった人なんかもいるじゃないですか。だからそれ以上っつうことですもんね。で、どこその人はまだ見つからないっていえば、手だけがパッとこういうとこから出てれば、ああいたーってことになるわけですよ。で、近所の人も駆けつけて、誰だべってことになるんだけれども、まともな顔の人だけじゃないですもんね。やっぱりがれきに揉まれてるでしょ。そうすれば顔もこう骨折するじゃないですか。鼻も曲がれば何も。顎とかひしゃげてるじゃないですか。ああ、誰それさんに似とるけどなあっつう感じ。そうですっけ。ほんで、あの最初のころは警察に連絡して、警察が来て、結局、そこの現場を見てっつうようなこと、いつもの通りのことをやるつもりだったわけでしょ。どっちに顔を向けてたとか。私たちには訳がわかんないですよ。早く運んであげてね、そんなどっち顔向けてたって何かってことまで（訊かなくてもいいんではないか）。事件か何かで、普通の日常で死んでる人がいるっていうんだったらわかる。そんな波で揉まれてきた人が、どっちに向いてたとか、足が上だったとか下だったとか、関係ないんだろうと思うんですよ。おかしいんでねえかそんなことっていうことになってね、それがだんだんなくなってきて、すぐあの自衛隊の人が収容袋か何かに入れて運ぶようになりましたがね。規約どおりにするんだっけね。

■想定しているようでしていない

だからやっぱりそう非常時の態勢ができてないというか、わからないでしょ、想定してないんでしょ。想定してないとは言っても想定はしてるんですよ、みんな来る来るって言われてたんだから。20㍍以上の津波が来ますよって。そしたらどこさ逃げたらいいんだんべって田老の人なんかは言ってるわけです。そりゃあ言ったんですもん、宮城県沖地震で必ず津波来ますからって。いつ来てもおかしくないって。だから誰も想定してなかったってことはないわけでしょ。みんなわかってるんですもん。ハザードマップで浸水域も何もぜんぶ作ってあるんですもん宮古市は。それでもこれなんですもん、そうですもん。だって津波来るなんて言っても、はっきりいえば誰も参加しないんですが。あの、そういう小学生か何かの一生懸命やってるところはやるんです

よ。

■独居老人や身体の悪い人が逃げ遅れる

だけどそうでないところは、私の管轄でも独居老人なんかが多いんですよ。古いあのアパートじゃなくて、古いほんとに風呂なんかないようなところに、独居老人が点々点々といるわけですよ。そういうとこの人たちは、なあに津波なんか来るわけねえべがすかっていうことになってるんですよ結局。あの防潮堤があるから、越えてくるわけがねえべやって。でも来たでしょ。来て、ほらみんな道路にこれくらいの黒い水がザーッと来たから、ほれきたほれきたーって言って、はじめて、道路出てきて足取られて流されたんですもん、みんな。そして川べりのところ、膝まであるようなところで足取られて、でみんな見てる前で、若い人でも電柱つかまってたのを手を離して流されていったとか、2階からそれ見たって人、なんぼでもあったんですもん。中にはやっぱりその、身体が悪くてデイサービスに行ってるご夫婦がいて、地震の後、そこにやっぱり社会福祉協議会の職員の人が行ったらしいんですけどね、大丈夫かなって感じで。次の日、津波の後に捜しに行ったら、その人もやっぱりご夫婦と一緒に3人そこで死んでました。そうですもん。あそこで二十何人って亡くなってますもん、老人とかなにかね。

■元に戻って忘れてしまう

ううん、誰も参加しないんですよ。そして次の年にはさすがにみんな参加しましたよ、津波の避難訓練には。あの、働きに来てる人たちも、建設屋さんで中にいる人たちも、10人くらいぞろぞろって、あなたたちは参加者ですかって聞いたら、そうですって言ったから。それまではそんなに参加する人はいなかったんですよ。それもまあ次の年で3年目ですか、こないだはだんだん少なくなってきましたよ、うん。だから、やっぱり元に戻るんですがね。忘れるんですよ。忘れてるからこうやって流された経験を一生懸命しゃべれるんですよ。

■お客さんに話すとシーンと聞く

お客さん、来るでしょ。結局、お盆で、あの早めにお墓参りに来る人とかいるわけです東京の方からとか。そういう人たちに話すると、ああやっぱりテレビの中で見ただけではわからないことがあるんですねって言いますもん。シーンって聞きますもん。いままでああでもねえこうでもねえって言ってた10人位の人たちがね。待ってえそれからどうしたんですかって言うから、順番にしゃべるから待っとがんせって言って、そしたらみんな、はあって、こうなってくるんですっけ。うーん、そうやってねえ、遺体とか捜索して、ああ生きて見つかった。この位の小さいワンコが生きて見つかったですよ、それだけでした。舌をベロベロんって出して衰弱したような感じで、だけど飼い主が見つけていきました。ああよかったなあってのはそれくらいでなかったか。

■3食たべなくても大丈夫なのに、食べないとだめだと思う

それで後は結局、自衛隊の人たちが一生懸命、炊き出しで運んでくれたじゃないですか、ご飯とかお汁とかおかずですがね。でもね、みんな3食たべるのに慣れきってるから、3食くわねばだめだと思うわけですよ。食べない人もいるのにね、と思うんですよ。1週間、水だけあれば大丈夫なんです。みんな焦って、食べねばならないけどもどうすっぺが。食べなくてもいいのにね、水だけ飲んでれば大丈夫だって。山で遭難したとか海で遭難したとかと思えばいいんですよね、はっきり言えば。あの、海だとライフボートの中にはちゃんと非常食が入ってるけど、がんばれ、間違いなく助けが来るって紙に書いてあって、1週間食べなくても大丈夫だって紙が入ってるんですよ。で、飴とかなんとか入ってるんですよ。そうなんだけど、なんて言うのかな、人間ってこう、そういうような気持になってくるんですね。

■情報がないと噂を簡単に信じてしまう

そして、デマでしょ。噂が流れてくるとすぐ信じるんですがね、情報がないから。テレビもなにもなかったでしょ、だからねえ、あの山

田町っていうかね、町の名前出して悪いけど、あちらでは自動販売機はもうみんな壊してみんなとったとか、そりゃああちらは火事でも焼けて何人も亡くなったんだから。宮古市はまだ奥のほうのスーパーも何もあるじゃないですか、だからまだ、被災してないところもあっけど、あっちはぜんぶ焼け野原で、全滅だ、壊滅状態。壊滅状態ってどんなことなんだべっと思うわけですよ、私たちは。未曾有の大災害だって、ううーん。でも物を持ってる人とか車で食物を持ってる人がいれば、車から引きずり下ろされたんだってって言えば、信用するし。いや、女の人が強姦されたって言われれば、それも信用します、うん。そういうデマをすぐ信じるんですって。何にも情報がなくって、だんだんにラジオだテレビだって言ってるけど、テレビは政府広告機構だかのやつばっかりで、たまにニュースが出るくらいだったじゃないですか。大変なことになったなあって思ったですよ。でも宮城県沖地震とは違うんだっていうことになって、ほう、そしたらどういうことになるんだっぺって。宮城県沖地震だと思ったんですよ、私たちは。でも違うっていうことになったわけで、震源地がね、宮城県沖地震はね、まだそのままだっていうから、ほお、じゃあ今回の津波の震源はある程度予測されたところじゃなかったんだあっと思ったですよ。それでまあ福島の原発までは頭が回らなかったですけど、大間（青森県）の原発は知ってたから、大間はどうなったのかなあって思ったら、大丈夫だっていう話だから、うんじゃあまだいいんだなあって思ったですよ。

■新潟のブルボンが直にお菓子を届けてくれる

それでも、しばらく結局、スーパーにもパンとか納豆とか豆腐とか、毎日来るようなものは流通がダメになったんで途絶えたじゃないですか、そして物が入るようになっても、結局、1人1個ずつですもんね。パンを普通に食べてるのに、ああパンは久しぶりに食べるなあって感じ。そうですもんね。新潟にあるブルボンってお菓子屋さんがやっぱり中越地震のときにみなさんにお世話になったからって、ガソリンがないのに、自分たちの会社のワゴンで直に持ってきましたって、お菓子から何から、避難所にね。高浜地区避難所に配って、ハンコもらってって感じ。よく来たですがね、ガソリンがないのに。やああの中越地震のときは私たちが世話になったからって、直に持ってきたいと思って持ってきましたって。いろんなのがそうやって来るようになりましたからね。まあ私は車も流されたから、ガソリンスタンドに並ぶってこともなかったですけど。自転車であるくしかなかったですけど、まあガソリンがなくてね。あの頃10リッターいくらだとか、後はあの、放置してある車からガソリン抜こうとしたりした人もいたんですよ。そんなこともあったですがね。

■異人館、津波に流されかける

そしてそれから、私は結局ね、ここ水も電気も何も通ってない状態だったし、ここ店もちょっとダメな感じだったでしょ、で、おふくろたちは病院に入院してたから。私の自宅はこの2階なんですよ。その時は私の女房は、津波の後にね、結局、内陸の実家のほうに帰ったんですよ。怖かったんでしょ、波がうわーんと来るのが。あっちのほうの高台から見てたんですっけから。この建物よりもずっと高いところまで飛沫（しぶき）が上がったんですっけ。で、ここまで水没するでしょ、天井まで壊れたんですもんここ。だから流されないであったのが不思議なくらいで。隣近所もみんなあったんですもん。

■生と死のわずかな分かれ目

あのお年寄り、おばあちゃんと1人きりの弟さんがいて、おばあちゃん足が悪くて、それ助けようと思っているうちに、家ごと流されていったんです。で、おばあちゃんは遺体で見つかったし、弟さんは行方不明。うん。そういう人たちもいるし、たまたまそこの家に車でお母さんと小さい子供が走ってきたら津波が来て、ざーんと玄関のところに突っ込んだんでしょうね。それで、この家に入って、お母さんと子供が家の中に入ったんです。で、流される前に窓から山さ逃げろって言って、その親子は助かったんです。そういうこともあるんですわ、いろいろ。

ほんとに、危機一髪っていうか、わずかなところで流されるんですがね。助かる人は助かるし。あの金浜の捜索してるときもね。なあに、こう杖ついておじいさんが歩いているわけですよ。ああおじいちゃん助かったんだあ大丈夫だったんだあって言ったら、うんにゃあ前の戦争でも助かって、その前の津波でも、昭和８年ですか、それも助かって、今回も助かってって、大したもんです。杖ついても20分か25分あったじゃないですか、地震があってから津波が来るまでが。だからそれでも、そういう足の人でも、高いところに上がれば助かるんですがね。でも、上がんない人がダメなんですね。で、時間が変に20分30分あるから、戻る人が出てくるじゃないですか、１回高いところに上がっても。様子見てて、ああ水が引いてった、まだ来ねえって誰か言えば、おれもじゃあ金庫からあれ持ってくるとか、玄関に鍵かけるの忘れたとかです、そんなことで行くんですもんね。で、ダメになった人もいますがね。だから何も持たなくてもいいのに、ハンコも通帳も何もいらなくて、郵便局に行けば10万だかは下ろせたんだけどね、通帳も何もなくても。当時、当座の金は。まあ結局、機能しているスーパーに行ってこれ買うってことでしょうけど。だから通帳も何もいらないわけですよ、実印も何も。でも、結局ね、戻る人がいるんですよ。戻れば、やっぱり10分行って、中で10分やって、帰ってくれば30分ですもんね、間違いなくやられますもん。それでも当日は電気が止まったんで、やっぱりその辺のパン屋さんで働いてる女の人は、赤前のほうにお母さんがいるっていうので、車でばあっと行ったんだそうです。それでお母さーんって車乗せて、そしてずっと向こうの藤畑って津波来なかったほうまで行って、助かったんです。それも信号が止まってるからね。都会だとほら渋滞するじゃないですか、信号が点かないと。この辺は割りとその、渋滞ってことにはならなかったんですよ。まあそもそも交通量はそんなに多くなかったですからね。だからそうやって助かった人もあれば、逆に、海のほうを通ってダメになった人もいるし、いろいろですがね。なんであっち行ったんだかねあの人は、あっち行けばよかったのにって。あとは、みんな三陸縦貫自動車道、金浜までは通ってたんですけど、そこみんな歩いたり自転車で行ったり、みんなそうやって行きましたがね。

■もういいよみんな投げろ、という感じになってしまう

まあとにかく、テレビではわからないのは、黒い泥ってもんじゃなくて、ヘドロと、灯油のタンクがあるわけですよこっちには。１００リッターとか、２００リッターの灯油のタンクが各家庭にあるわけですよ。それがぜんぶ流れるわけですよ。あれ流れれば、スポンと抜ければ、ホースから灯油がダーッて出るんですよ。だから街のなかはぜんぶその灯油の臭いとヘドロの臭いが混じったので、泥がますます油が入ってっからネチャネチャになるんですわ。で、洗っても、油が入ってるから、洗ってもダメなわけですよ。水道もろくに出ないし、当然洗剤もないじゃないですか、で、まあ長靴じゃないと歩けないでしょ周りもなにも。で、何やったらいいべえって何からやったらいいべなあっていう感じ、みなさんがね。そしてやっぱり近所の人が、汚れたの道に出せば、市役所でみんなゴミで持ってくよっていってたよって言うから、みんな出したわけですよ、家の中からものを。で、濡れた畳も表に出してどうにかするべえってやったわけでしょ、でも投げ（捨て）なくてもいいものも出したわけですよ。洗ってとっておくって気にはならねえんですよ。もういいよもうみんな投げろっていう感じ。お皿でもなんでも後で洗えば大丈夫なんだけど、その時はもういいから出せって感じ。後になってから、ああ投げねばよかったっていう。何もね、臭いもんでもなくシミになるもんでもなかったらば、別にいいわけですから。みんなの集団心理ですもんね、道路にはみんなそういうがれきっつうかゴミでもねえがれきがぜんぶこう、人はその間を縫うようにして歩いて行ったんですいつも。それで、後でボランティアの人が来たんだけれども、初めから来ることがわかってればそんなことしなくてもよかったんです。いろんな人が来たんですよね、ボランティアで。だから私たちが、年取った人がそんなことやんなくてもいいんだけど、だまってられないんでしょ、ボーっとしてると不安になるんじゃないで

すか、心理的に。そういうことですっけね。私もまあだから捜索してたってのは同じだと思うんですよ、何かかにかやってなければダメだという感じで。

■ありがたかった自衛隊

印象的だったのが、自衛隊のお兄ちゃんたちが来るわけですよ、若い人たちなんですけど、来てまずは現場をみて、初めて見るでしょ、そういうこう、がれきの状態の街をね。そうすると、どっからどうやっていいんだかわからない、だから消防団の人や地元の人なんかにどっからどういうことが必要ですかって聞いてね。それから、あの家の屋根の下にはきっとまだ人がいる、だからその人を探してくださいって言えば、道具もないから屋根はがして板も剥がして、チェーンソーで切って、人がいねえか探す。確認したのは印しをつけて、車の中も見て印しをつけて、全部やりましたですもんね。だからもう頼もしく思ったんじゃないですかね。子供さんが大人になったら自衛隊になるって言ったって言いましたもん、やっぱり子供は正直だと思います。いやほんとに自衛隊がいなければとても無理だったって言いますもん。すぐ来てくれましたからね。まあ屈強な、訓練してるんですもんそのために、あの人たちはね。だからね、また痩せてればあれだけど太ったおばあさんを背負ってね、こう坂を高いとこさ避難させていく、一生懸命やるんですってよ。ああほんとに偉いもんだなあって、自衛隊ってのはいねばとてもダメなんだと。

自分たちはこんな缶詰のやつ食べてるんですよ、４種類か５種類ぐらいのやつ。それでも、温かいのを食べれるからまだいいですよって言いましたっけ。結局、冷たいもんでもなんでも食べていかねばならんでしょ、火が使えないとかね。だからそういう自衛隊の人たちとも話すわけですよ、大変だねって。ご飯だ、肉がいっぱい入った肉ジャガだとか持ってくるけど、何を食べてるのって聞くと、野菜がちょっと食べたいですねって言いましたもん。

■ソフトバンクの仮設アンテナをａｕの作業員が建てる

いろんな人がおったし。ソフトバンクのジャンパーを着た人たちが、一生懸命仮設のアンテナを建ててるんですっけ、金浜の避難所のところに。私、声かけたんですよ。「ソフトバンクさん、一番つながんなかったっすっけね、ａｕが一番で次がドコモでソフトバンクさんはその次ですね」って。

「あのですね、実は私たちはａｕなんですけど、ソフトバンクさんに頼まれて仕事してるんですよ」って。そういう事情もあるんだって初めてわかるでしょ。声かけないとわからないでしょ。電柱たてるの早かったですよ。やってる人たちもみんな他からですもんね。みんな秋田のほうから来てるとかです。どこに泊まってたんだかね、あのころあの作業員さんなんかはね。他のところから応援部隊で来てるから、みんな場所の名前なんか言ってもわからないんですっけ。だからそういうような人がいっぱいいましたっけ。

■写真も額もみんな投げてくれ

それから次は、私は土木作業員もやりました。結局その、人手が足りないわけですよ。だからがれきになった家の解体だとか、あといろんな土木作業ですがね、じゃあ今週はあっち行けとかいわれて、いろんなことをやりましたがね。そしてから次には、がれきの分別作業をやったんですよ。あの、東京都が宮古市のがれきを受け入れるということになって、その最初の時があったんですがね。その年の11月ころ、私はその会社に行って、がれきの分別をやったんですよ。でそのときの民主党の環境大臣ですか、あの男ぶりのいい人、なんだっけかなあの人、報道陣も東京のほうからやっぱりやってきて、１００人くらいだったですか、宮古市から東京都へ第１号のがれきが行きますってそういうのを撮るのにね。そうすると、がれきにもいろいろあるんですよ。思い出があるような品もあるんだけど、なかなかね、みなさんそうやって投げたんですよ、そうやって泥がついた状態だから。だから写真なんかもあるんだけど、写真もなあ、欲しがる人もいるし、あと

はいらないって人もいるしね。解体する家でも、子供さんの賞状とか貼ってあるじゃないですか、額とかね。それも、これはどうするんですか、これは持ってったほうがいいんじゃねえのって言っても、いやあいいからいいからって、全部ぶっ壊してくれって。なんかひとつくらいこう思い出にするものがあってもいいんじゃねえのって言ってもね。ああいいって、解体してくださいって、解体したんですがね、みなさんがね。

■建物の解体、運がよかった人と悪かった人

もう、タダだっていうから、解体するのがね。それで助かった人もいるんですよね。年寄り1人だけで住んでれば、解体するったってけっこう費用もかかるじゃないですか。解体したくっていて、津波がきてタダで解体してもらったってとこもあるんですもんやっぱり。こういう話してもいいんですかね、いやあるんですっけ。うまくやった人もいるんですよ、そういうふうに。だって通りのところで店子があってみんな貸してやってるとするじゃないですか。そしてその土地はみんな私のものだとするじゃないですか。そこの店を津波でみんなやられたわけですよ。立退きやって解体するとすればお金いるじゃないですか、それがなしでいいんですもんね。この壊れた店はみんなタダで壊してくれるんですが、タダで。そうすればこの人は一番いいじゃないですか。でも、もう商売やめてって思ってて鉄筋コンクリートの建物があるんだけれどもってのも、みんなタダで壊したんですもん。何千万だべね、やればっていうのを、タダだったですもん。だから得した人は得しましたもん。持ってる人はタダで壊してもらって、アパート建てていま貸してる人、どこでもあるんですもん。だからね、うまくいったひとはうまくいってるんですよ。一番悪いのは、店舗の借り手やってた人は何にもお金降りなかったですもん。借りてる人はダメなんですよ、補助金も何も下りないんですもん。自分の建物が壊れたのであればいいんだけど、電気屋さんで電器がいっぱいあったって言っても、これ借りてる建物ではダメです。中のものもダメ。みなさんこれね、地上デジタルで買い時だったんですちょうど、大きなテレビにしたんですよ。でもそれもみんな流されちゃったでしょ。がれきの分別に行くとテレビの液晶なんてペラペラってなってるって、これがそうなのかってものですもんね。みんなだからローン組んだりして、もうないテレビにお金払ってんだって人も、なんぼでもありますもん。だから運が悪いってそういう人もおるし、運がいいっていうか、よかったなあうまくいったなあって人もあるんですよ。だってあそこのホテルが、景気悪かったから解体したものもあったけど、あれ、津波が来てからだったらタダで解体してもらえたのになあってこともあるわけですよ結局。魚市場のほうだって、そりゃよくなったって、みんなタダで壊してもらってますもん。こないだ火事になったけどね、そういうこともあるし。わかんねえですよ世の中は。

■人の目を気にせずものを食べられるうれしさ

仮設ができた時はみなさん喜んだんですよ、6月に仮設ができて入れるって。私たちが白浜って地区で土木作業してたときに、やっぱり働いてる人たちも避難所にいるわけですよ。で、避難所にいる人たちを非常時ということで使っているわけでしょ。で、漁師さんだけど、もう舟もないからどうなるんだかなあって言ってたんですよ。で、仮設ができて中に入ってみると、まあ立派になるわけですよ、流しも何も、やあこんなになってんだあ、風呂があっていいなあって、じゃあ今日から布団で眠れますって。それまで布団じゃないですもんね、マットレスだとか敷いて。何が一番かって言えばやっぱり、家族水入らずで、人の目を気にしないで、ものを食えるってのが一番でしょ。なんでもいいっけ刺し身でも買って食べっぺしって感じで、ゆっくり奥さんと旦那とこう酒呑んでスルメの刺し身かなんか食べるっつうのがね、人の目気にしないでね、一番よかったんですよ。

■避難所暮らしで人の気持ちが荒んでいく

だって避難所ではなんぼダンボールで目隠ししたって、みんな見て

るんですもん。子どもなんかが、あースルメの刺し身食べたっけえって言うじゃないですか。そしたら、あー食べろって。食べた気がしないんですよ、ほんとに。そのストレスなんですよ一番がね。だから目隠しで囲ってるんだけど、それでも見えてるわけですよ、うーん。24時間、一緒なんですもんね、暮らしてるのが。あそこの奥さんはなに、いつもいい話ばっかりしてるけど、実際はトイレの掃除だとかなげてもさっぱりやんねえっけとかです。ぜんぶ見られるんです。だから今回の避難生活ではね、もうわかられてしまうんですみんな。それで、人の気持ちはね、だんだん荒んでくるんですがね。もう支援物資だってくれば何でももらうんです。支援物資が来るでしょ、避難所の中にね。はいはい1人1つって、もう1回来てもらってく人もあれば。同じ地区でも、あんたの家は2階が大丈夫であそこに泊まってるんでしょ、これは私たちに来た支援物資だからあなたにあげる支援物資はないですって言われた人もいるんですもん、同じ町内でもね。それに対して、そんなことはないとは言えないですよ、そういう人が少なくて、こっちが多いんだもの。揉めたくないじゃないですか。

■避難所の情報交換

避難所にいると夕飯で人が集まるわけじゃないですか、そうすると日中いろんな人と話していろんな話を仕入れてくるわけですよ。山田から帰ってきた人の話だってよってのが、みんな集まったときに出るわけですよ、自分の行動範囲は狭いですから。5人くらいで、あっちから来た人の話だとこうだったとか、こっちから来た人の話はこうだったとか、来るじゃないですか。で、その人たちはまた他に行ってしゃべるんですよ。田老は壊滅状態で、役場と何軒かしか残ってないってのは、想像はつかないんだけど、みんなこう山越えてなんなりして歩いて来たんですもんね。

■保育所の子どもを避難させる

宮古の保母さんで田老の保育所に行ってた女の人もいるんですよ。私も後から聞いたんだけど、その子もあまり話したくなかったんだけど、私もほらそういう目にあってるでしょ。話がフッと出たんですね。だっけば、お家は市役所の近くのところだから、当然家もダメだべなあと思うじゃないですか。でも自分はちょうどお昼寝が終わったころで、小さい保育所だから、1歳から何か月から何からみんな預ってるわけでしょ。その子たちみんな避難させて山の方に避難するのに、バアっと後ろみたっけが、津波が、空から来る感じ。結局、防潮堤を越えて来るでしょ。こう見れば、上から来る感じがするんでしょ。そしてやっと神社のほうに逃げたんだけど、飲む水もないから、たまたま持ってた人がペットボトルの水を子供たちにキャップ1杯ずつ飲ませたってば。そういう話聞くとね、自分の親も心配だったんだけども、そういう子供たちいっぱいいるし、そういう話聞くとねえ、グッときますけどね。いままで話してなくても、やっぱり何かね、こう話したくなるときがありますよ。そうしないと、心に溜まっていく、どんどんどんどんグウっとなって、ダメですもん。

■2年3年たつといろんなことを考えだしてしまう

親戚が、奥さん何だか具合が悪そうだって、何かしたんですかって聞いたらば、その人の親戚や親が9人亡くなった。一気に9人もね、山田町でね。やっぱりもう布団かぶってね、もう何も考えられないくらいになって、はああって、そうだったって。ノイローゼになって精神安定剤かなんか飲んで。そうですっけもん。で、3年経って、いま、1年目はなんてのかなあ、何かしてねばなあって感じで動いてるじゃないですか。先のことも考えたって仕方がないんだし、でも2年3年ってなってくっていうと、今度はやっぱりいろんなことが、思い出してきたり、考えさせられるんですがね。いつまでも片づけてばかりもいられねんだっけし。今度は仮設出て家建てろったってそんなに簡単に建てられるわけねえべしなあって。年もどんどん経ってくれば、年金暮らしの歳いった人たちはこの先どうしたらいいんだべってなるじゃないですか。

■お金はもっているが不安で使えない

でも持ってるものは持ってるんですよ、お金は。田老町もそうですけど、無くなれば、見舞金もそうですけど、保険金もあるじゃないですか。大なり小なりかけてるでしょうから。だから、もらうのはもらったんですよ、みなさん。それで、通帳に預ける人はあっても、借りる人はなかったんですもん。いま家を建てたりなんだりするので借りる人も出てきているでしょうけど。それまではお金はあるんだけど、ほらでも先がわからないから、不安なんでしょ。災害公営住宅もできてるじゃないですか、何箇所か。でも、私もできたら入りますって言っても、手あげてても、入ったのは半分にも満たないわけですよ。それはやっぱり、入れば家賃がかかるじゃないですか。仮設にいる分にはタダですよ。そうだと思いますよ。だって入ればお金かかるんだもの。たいてい2万円から上は6万円くらいですか。大きさと所得に応じて。それでも、一生懸命相談すれば、2万円より少なくなることもあるとは思うんです、年金暮らしだということになれば。それでもほれ、お金がかかるんだから、タダでいれるうちはタダのとこさいるべってなるわけですよ。でも今週で終わりですから次は引っ越してくださいって言われたときに、みんなそこに殺到したらば入れないでしょうね、たぶん。だから、そういうことになるんですがね。

■もらって助けられてばかりではだめ

私も支援物資が体育館にこうあるんで、もらいに来てくださいってのがあったんで、行ったことがあったですよ。避難所ってとこはいいんですよ、そういう情報が密に来るから。必ず支援物資がドーンと来たりするのがあるけど、建物が壊れてるけど2階のほうに住んでるとか、アパート借りてそっちにいるって人たちには、その情報は来ないんですよ。例えば内陸の盛岡か何かだって行かなきゃいけないじゃないですか、情報が。盛岡のほうにもあったんですよ、そういうこう、支援物資があるところがね。でも盛岡は大きいけどちょっと離れてるから、そこまではなかなか行かないじゃないですか。だからこのテーブルの中から、日用品がこの中にありますから、なかから1点選んでください。こっちのテーブルの中からはまたそれも1点って、こういうふうに決まってるんですっけね。そうするとね、1点って言っても、これも1点です、例えば洗剤のセットなんかのちょっと大きいものも1点なんです。そうすると、どっちが得なのかって思うじゃないですか。そうするとね、おれこっちだなあとか、歯ブラシ1本でも1点ですよ、歯みがき粉がついてても1点なんだもん。そうすれば、そういう心理になってくるんですっけ人は、荒んでくるんですがね。だからあの、いらっしゃいっていうからね、どうもって持ってくとね、あれは100円ですって言えば、お金とるのって言って戻す、そういう気持になってしまうんです、なりたくなくても。やっぱりもらい続けてはだめだ、もらって助けられてばっかりではだめですもん。他の人たちも、誰かの役に立つんじゃないかってことで何か一生懸命つくって、それを売って、アフリカの子供とかにあげてるところもありますけ、やっぱりそういう気持が、ほんとは必要なんだけどもね。ただただもらってるだけってのは、気持が荒んでダメですよね。言われるんですよ、あのあそこのなんとかさんとこは、みんな避難所に行って物資をもらって、朝昼晩とご飯のでる時に夫婦で行って、ああ今日はこれをもらって帰る、夫婦で行ったら2つでしょ、小屋ができたんでねえかっていう噂されるんですもん、そういうこともあるんですが。だからね、それもみんな、気持がみんなりたくなくても荒んでくるんですもんね。前はそんなことではなかったんだけどね。

■仮設住宅もピンからキリまである

いままだ仮設でしょ。いや仮設はひどいところでって話ばっかり出るけど、前の家よりずっと暖かいですって人もいるんですやっぱり。だってもともと木造のこう、なんぼストーブ焚いても暖かくならない部屋にいたんですもん、例えば漁師さんとかなんかはね。私の街のほうにあった家もそうだったけど、断熱材も入ってないところもあったんですよ、みんな。それから比べればいいや、大したもんだ、暑くな

ればエアコンってやつを入れればって、いいって人もあれば、それに仮設って言ってもほんと薄仕上げだったようなやつは一番最低じゃないですか。でもハウスメーカーなんかが建てた仮設はいいんですっけ、公園かなにかに建てた小じんまりしたようなとこは。だから仮設はピンからキリまであるんですもん。一番ひどいのは田老の４００所帯が入ってるところなんかは、ひどかったでしょ、グリーンピアのところの。建ててるのを見たけれども、ただ杭打って、バタバタって組み立てて。で、もともとあそこ寒いところだから。だからね、わからねえ人もいるんです、エアコン使ったことねえからね。ああおばあさん、エアコンが暖房になってますとかね、そういう問題もあったですよ。

■道路を一生懸命つくっているが、人も車も減っていく

いま3年経ってどうなんですかね。まだ、何やっていいんだかって、役所でもなんだかよくわからねえけど、計画はなんかやってっけど、道路だけはやってますよね一生懸命、トラックがね。あそこは何ができるんですかって、あそこただ道路から出た土おいてって、また持っていってるようだっていうんだけれどみんな。計画だけずっとあるんだっけ。予算もつかないからできるはずないっていうような道路が、いまできますもんね。ここ5、6年でぜんぶできるでしょ。ずっと重茂の方へもぜんぶトンネルで行くんですもんこんど。そんな夢みたいな話はみんなこれ津波のおかげ、ですもんね。津波で亡くなった人のおかげですが。その、いのちを助けるっていう名目の道路ですもん三陸縦貫道も。前であればこんな交通量のないところにつくる必要はないっていうことだったじゃないですか。だって税金の無駄遣いだって。だからそれも、復興のいのちの道路ってことでお金もとれるっていうし、まあでもできてしまえば今度は車が少ないでしょ。少なくなるんです。人口も減ってくれれば、おお久しぶりに車走ってったっけっていうようなことになんでねえかってみんな言いますよ。今でこそ建設のトラックがみんなバンバン来てるじゃないですか。他からもレンタカーのようなのが他県からも来てるけど、そんな走ってる町じゃなかったんですもん。人口流出はしてるし、そうすれば、みんな復興の事業が終われば、人は少なくなって、車だって走らなくなるんだから。だからいまの復興需要で一生懸命稼いでる人は稼いでますよね、でも変わりない人は変わりないし。

■お客さんにゆっくりしてもらえる店にしたい

私は、いろんなことがあったけれど、やっぱりあのとき、いのち落としたかもしれねえなあって気持もあるじゃないですか。でもまあ店が残ってて再開できたでしょ。生き返ったようなものじゃないですか、店もね。私も生き返ったし、また第2の人生だなって感じもするんですが。やっぱり今までと違って、お客さんなんかともしゃべっていけるような、ゆっくりしてもらえるような店にしていきたいと思ってるんです。1回死ぬ思いしたんだから、自分には怖いものはないんだから、と自分に思い聞かせて。あとはお客さん、のんびり、だって食堂ができたんですけど、結局ゆっくりする場所がない。あの、話するとこが。まさか仮設でたとこで、そこでお茶っていうこともないじゃないですか。ほうすれば、あそこの店始まったっていえば、行ってみしって来るわけですよ、とかね。いつも2人で来てたっすが、もう1人の人はどうしたのって言えば、あの人はねえ、まだ見つかんねえんだって言う人もあるんです。ある親子で、あの娘さんと来てたっけねえおばあちゃんがね、って言えばね、あの娘はね、震災では大丈夫だったんだけど1年くらいでねえ、癌だったのかなあ、バタバタっと亡くなってねえって。いつも娘さんに連れられて来て、お昼食べてったじゃないですかって。でもやっぱりううんあの席でいつも私たちは食べてたって言うんです。やっぱりその人たちの想いがあるんだと思うんですよ、あそこの店に行って、あそこの席だったって。行けば、その人の供養にもなるのかなって思うらしいんだっけ、その人たちは。けっこういますもん震災後に1年かなんぼで亡くなったって人が。いろんな心労が重なったりとか、病気とかなんとか、そういう人があるんですよ。やっぱりそうするとね、こうこうこうでそうかそうだって気持になるんで

す。

■みんなの気持ちがうれしい

そうなんです、思い出の場所なんですっけ。二十数年前に来たとか言うんです。ここ26年位になるんです、最初にオープンしてから。だから、3年は休んだわけでしょ、店がね。ずーっと続いてればなにもこういうことはなかったと思うんだけれども。そこで1回、3年休んで、壊れて、再開した。みんなが待ってた、それで来たでしょ。みんな思い出の場所だってことになるんだっけ。この味は私の青春の味ですって。そうかこのおばさん二十数年経ってるから、そうか当時は20代だったべねって思うわけです。私はじめてここに来たとき彼と初めてデートして、いまは結婚して内陸にいるんですけど、子どもはこんなに大きくなって、それで来ましたっていう人もいるんです。じーんってくるんです、はあそうだったのかあって。いつも通るたびに気になってたけれど、もう再開しないのかなあって思ってたらば、再開したっていうんで入ってきました、よかったですって書く人いるんです、みんな気にしてるんです。津波でやられるでしょ、はい、気にしているだけじゃだめなんだから、勇気をもって入らなきゃだめなんだから店にはって言ったんだけど。そんな気持ちが、みんな自分のことのようにうれしいんですっけ。店が再開されたのが。思い出の場所なんですよ結局。やっぱり思い出を失くしたくないんでしょ、その本人のお客さんが。（注：床を指差しながら）だからこれ前の床と同じなんです。津波の前からの床で、傷がついてるのは津波の傷なんですがね。あの奥のほうの部屋のシャンデリアも、あれは前の部屋にあったシャンデリアで、津波の後ちゃんとあそこにぶら下がってたんですよ、わりと壊れないで。それを磨いて同じものを結局つけることにしたんです。それで来たお客さん、ああこりゃ前と同じだねえって言うんです。ここは全部変えたわけでなくて、これは前とおんなじだがねって言えば、やっぱりうれしいでねえですか、と思うんです。

■うれしいお客さん

（注：２０１４年）４月の20日に再開したんですけど、その３日間は無料にしたんですよ。３日間はなに食べても無料だって、ただだからって。小学生にみえたんだけれど、男の子がふたり入ってきてす、あっちの席に座って、チョコパフェくださいって言うんですっけ。手には１００円を６枚握っているんですよ。お兄ちゃん今日はいいから、ただでいいからって言うと、いやそんなことはせっかく持ってきたんだっけから、子どもが１００円玉を手に痕がつくくらい握りしめて。あのお父さんお母さんどうしたのって、いやぼくたちふたりだけで来ましたって、やっぱり行って食べてみたいって。食べて、どうだって言うと、やっぱり違うなあって話をしてました、大人ぶって。親に前に連れてこられたんでしょう、で親に始まったから行ってみろって言われて来たんでしょ。そういう人が来ましたね。ほんとにねえ、涙が出るような感じで。お盆に遠くからご先祖を拝みに来るでしょ、ああ今年もまだ閉まってたって。次の年も閉まってたってなるでしょ。で、今年はやってるって喜んで来た人もいますもん。そういうこともあるんですよ。それでけっこう新聞だとかテレビだとかにも紹介していただいたんで、ＢＳ朝日さんに映ると、全国放送だから東京のほうからもテレビで見ましたよって来るんですっけ。私もやっぱり、ここが始まったっていうのは明るいニュースなのかなって思いましたよ、他の人たちにとってもね。

■子どもたちが津波の話をできるようになったときが復興したとき

そうでしょうね、心の復興だと思うんです。仮設なり復興住宅なりができてくる。まあそういうのは時間がたてば出てくるんだけれども、心の復興っていうのはなかなかね、すんなりとよくはならないっていうか、途中また下がってみたり上がってみたりっていう感じで、人それぞれ違うしね。外側からは見えないですしね。宮古市だけだって被害受けた人はそんなには多くないわけですよ。だって津波に関係ない人は、ぜんぜん関係ないですからね。津波の次の日から犬の散歩ですよ、

ふつうと変わりがないんですもん、日常が。それだけ違うんですもん。片方は家も何も流された人たちです。片方はふつうに犬の散歩なんですよ、それだけ気持ちが違うんですもん。水道が出るところは、泥の道走ってきたからって水道でじゃあじゃあって車を洗いますよ。こっちは、給水車だとか、どこかに水をもらいに行くんですよ、同じ宮古市民でもね。どっちも悪気も何もないんですけどね、それだけ違いますもん、気持ちもね。何にもなかった人は何もなかったんです。被害にあった人は、思い出の品も何も捨てるしかなかったんです。避難所に持ってったって置くとこもないんだから捨てなさいっていうかっこう。それだけ子どもの気持ちは大人より可哀想だと思う。だからその子どもたちが、おれたちが小学校のときこんな津波が来たって話ができるときが、復興したときなんじゃないですか、そう思いますよ。

■昔の人のほうがバイタリティがあった

小本ってとこがこの北のほうにあるんです。明治29年の津波は砂浜の方にいったけど、そこにあった集落はぜんぶ流されたからいまの場所につくって、それがまた今度の津波で流されて、次また他の場所に行くっていうパターンですがね、三陸海岸ってとこは。だってここぜんぶ防潮堤もなにもなかったんです、砂浜だったんです昔は。田老にしても防潮堤ってのはなかったんですから。ぜんぶざーっとくればざーっと流されて行っただけ。家財道具は当時は布団だけでしょ、畳か布団だけですもん、電化製品も何もないんですもん。いまの現代は大した家財道具なんですもんね。電化製品から何から、車もあるし。だから昔の人は掘っ立て小屋建てたって、別に変わりなく、またそこで住んだと思いますよ、バイタリティあると思うんですよ。いまの人たちはねえ、建てるのになんぼかかるかって考えれば、ちょっと無理な感じしますもん。昔から津波でやられてるとこでしょこは、それでもそこに住んでるんですもん。やっぱりそこはちょっと違うんですよね、昔の人の考えといまの人は。現代の、モノを持ってる時代の人は。

■伝えていかなければならないこと

だから高台に移転してもまた少しすると下に降りるのは、仕事するのに不便だとか、でも先祖代々ここから下は危ないから上の方だっていって、助かってる集落っていうのはありますよ。姉吉もそうだし、松月ってあたりもそうですもん。下の方はぜんぶ、田んぼやなんかはやられてるけれど、集落は10戸くらいあるけどそこは大丈夫とかね。やっぱり守ってるとこは守ってて、大丈夫なんですがね。それがやっぱり、下の方へだんだん行くと、やられるんですが。だからやっぱりこれは代々伝えていかなければだめなことなんですよね。そうじゃないと、また海岸のところへ行くんだから。まあ37～8メートルですけれどもね、遡上高がね。ビルの10階なんですよって。ビルの10階でここまでは来ないってところで消防団員が7人亡くなってるんです。ああいうところこそ、慰霊碑かなにか建ててやったほうがいいと思いますがね。そういうところは、海ははるか下ですもん、ここまで波が来たのか、へえって、はるかかなた下ですもん、とても考えられないですもんね。山から下りてきて初めて港が見える最初のところだったからそこにいたんでしょ。消防自動車も何もゴロゴロゴロってクシャってなって、7人はそこで亡くなったんです、すごいんですがね。ただただ水が来たっていう津波のとこもあれば、そういうガーってきたとこもあるんですが。

■慰霊碑を建て、それを忘れたころにまた津波が来る

私も写真は趣味でけっこう撮るんですけど。持ってたカメラは水かぶったから駄目だったけど、別のカメラ持ってたけど。あんまり撮る心境にならなかったですもん。たとえばその捜索現場なんかも写したとこもあるんですがね、時計かなんか針が止まっているとこなんか撮ったりはするけど。やっぱりその拝んでるとことかね、そういうとこっていうのは撮れなかったです。気持ち的に、駄目でしたがね。津波の慰霊碑ってあるじゃないですか。昭和8年とかね、あちこちにあるんですよ、誰も見向きもしなかったですもんね。結局ね、それくらい経

たないと、津波のことは忘れないんですよ。経てば忘れるけど、忘れたころにまたやってくるっていうパターン。いまもまだ建ってるじゃないですか、お寺とかいろんなところ、今回の慰霊碑が。あれにきっと手を合わせる人がいなくなったころに、忘れたころに、また次が来るのかなって気がしますけどね。その繰り返ししてるんでしょ、きっと。だからお参りする気持ちがまだ残ってるんでしょうね、残された人たちがね。だから昔の慰霊碑も供え物も何もする人もいないですもん。いなかったんですもん、ただあるだけです。当時の人たちは、これは記録としてここに建てるべしって建てたわけですよ、そのときは。けっこう各地にあるじゃないですか、南のほうでも大きな岩のところにありますが、峠かなにかのところにもありますっけね。昔とすればけっこうな金額だったんだと思いますけど、慰霊碑建てるのはね。でも建てねばだめなんだなと思って、建てたんでしょ。でもそれが古くなって終わり、変なものですよね。慰霊碑があって、また別のところに慰霊碑があって、それが繰り返していくのかなって思いますけど。

■話をして、伝えていく

お話を先生方にしておかないと、それが残らないじゃないですか。そうじゃないと私だけで終わりになってしまいますもん。私が何かって言わなくなったらそれで終わりじゃないですか。だからテレビの人だとか他のお客さんにもね、話するんですよ。やっぱり避難所ってのはそういうこともあるんだよって話もするし。わかんないんですもん。いつ自分が避難所に行く立場になるかもしれないんですよ、南海トラフだとか言ってるんですもん。こっちは20分あったけどあっちは10分ないんだってよっていえば、とにかく高いとこさ、3階だって危ないからねって言うんだけど。ふつう3階まで上がれば大丈夫だと思いますよね。それでも水が来て、水が引いたときにサーッと流されていくんですもん。そのときはほんと自分がカーテンレール掴まって助かったけど、おそらくキャーとかって声を出しながら流されていったと思うんですよ。それ見たり、あーって思って目を逸らしたりするのは、一生残ってると思う私は。同じ場所にいて助かった人もいるじゃないですか。流されたりした人もいるじゃないですか。あれ、わずかのところですもんね。何かをつかまってるか何かで助かってるんですよ。おそらく声だしてね、あーっとかなんとか言いながらいくんですよ。みんな高台とか避難所とか上がってみてるときは、ふつうにさっきの地震すごかったがねえとか、あんなのは初めてだあとかっていう話してるんですよ、みんな。それから津波が来るじゃないですか。そうすれば防潮堤があるから、まあ自分たちのところには来ないと思うんだけど、防潮堤を越えて来るでしょ。それでもまだ、越えたがねえっつう話はしてるんですよ。まだ冷静ですっけ、そのときは。それがどんどんどんどん防潮堤を越えて、ザーッと滝になって流れてきてそれが家にいって、家が動き始めたっていうと、あああーっとなって悲鳴に変わりますもん。それからですっけ。水はそこからどんどんどんどん増えていって1階がぜんぶかぶるわけですよ、そうすると動き始めるわけですよ。あー何々さんの家がーって。みんな、あああーあああって、あとはそれしかなくなっちゃう。それまでは気持ち的には大丈夫だと思ってるんですよ。いやあ津波が来るんだってねえっていう気持ちですっけ。それが、実際に目の当たりにして、自分の家が流されていくの見るわけじゃないですか。テレビと違う、そりゃやっぱりショックだったわけですよ。

安倍 主税（あべ ちから）：高浜「異人館」マスター、当時宮古市消防団第二分団副分団長、昭和30年6月10日生まれ。